琉球大学学術リポジトリ

毛起竜（識名盛命）　『思出草』：翻刻と注釈

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2007-11-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池宮, 正治, Ikemiya, Masaharu メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/2385

毛起竜（識名盛命）『思出草』－翻刻と注釈

池宮正治

一　紀行文『思出草』

言うまでもなく「思出草」は紀行文である。作者毛起竜（当時富盛親方、後の識名親方）が、王府を代表する年頭使として康熙三八（一六九九）年六月十七日那覇港を出帆、七月三日薩摩に到着、翌年十月初旬任期を終えて帰国するまでの、一年余りの見聞や出来事を記したものである。盛命はこれ以前、康熙二九（一六九〇）年にも、中国への進貢正使としての事務報告のため三、四カ月、康熙三五（一六九六）年にも、和船の火災事件を報告するために四ヵ月ほど薩摩に滞在している。『思出草』の旅は三度目の薩摩行で長期滞在はこの時が初めてだった。

年頭使は中山王府の薩摩の出先である薩摩琉球假屋（後に琉球館）の責任者で、琉球国王の名代として薩摩藩主に対して年賀の挨拶をするのが主要な役目である。当初王子クラスや三司官の一人がこの任に当たったりしたが、親方クラスの任となった重い役回りである。使者の面々は唐衣裳という明服を着用し、路次楽を奏しつつ鶴丸城に入り唐礼の挨拶をした。しかし一六四四年清朝の順治帝が北京に入城し弁髪令を発すると、琉球も翌一六四五年にはさっそく琉装に改めている。薩摩の使者が琉装に改まるのは、少し遅れて、一六九一年になってからだから、したがって盛命は琉装で臨んだはずである。規定では、夏は芭蕉布の黒朝衣、冬は綾子（綸子）、紗綾、縮緬といっ

た舶来の絹織物を着るとある。しかし一七二六年になって再び明服に復する。

『思出草』は冒頭に「おほやけの詔をうけて大和にわたりし詞」とあって、沖縄を出発する前後の出来事や、道の島々の難所を通過して薩摩山川に着き、そこに数日、多分船改めであろう、滞在して、七月三日鹿児島城下の琉球假屋に入っている。中山世譜付巻にある到着日「七月初三日到薩州」というのは、薩摩に着いた日というより、『思出草』でみると、琉球假屋に入った日であった。およそ一月後の八月六日には登城して藩主に面謁し国王の書簡と捧物を差し出して「御使の人事終ぬ」とある。年頭使とはいうものの、どうやら大役はこれで終えたもののようである。同月十四日には、上野寛永寺の根本中堂の落成を祝って、藩こぞりて盛大な祝賀会があり、これに参加することだけのために、盛命の船に同乗してやって来た津嘉山親方朝慶とともに登城、「御饗膳御茶など給り」「猿楽の御ゆう」もあったとある。この年のことはこの条だけで終わっている。以下、各題詞をあげて日時をみてみよう。番号は筆者がつけた。

上巻

一　おほやけの詔をうけて大和にわたりし詞（既述）
二　大隅の八幡宮霧島の御神に詣し記行（一月十四日～二四日頃）
三　村田氏のゑもん問ひ寄給ひし時の詞（三月十日頃）
四　同じぬしより茶会を催されし時の詞（三月下旬）
五　ある人花をめぐまれし時の詞（三月下旬）
六　岩切氏のゑもん歌書をめぐまれし時の詞（四月八日頃）

七　吉野の原の駒率見にまかりし時の詞（四月十日余り）
八　林氏の兵衛手鑑を見せ給ひし時の詞（四月中旬）
九　ある人うるま百合草を送られし時つかはしける詞（初夏、四月中）
十　尚益の君王子御誕生を祝ひ奉る詞（七月一日）

中巻

一　国母の薨御をいたみ奉る詞（六月～七月）
二　亡父の十三回忌をとぶらふ詞（七月七日）
三　みまかりし娘の十三回忌をとぶらふ詞（七月十五日盂蘭盆）
四　亡母をとぶらふ詞（八月四日）

下巻

一　陬訪の祭をおがみしことば（七月中下旬）
二　慈眼寺に詣し詞（八月十八日）
三　福山の駒率見にまかりし詞（八月二四日）
四　弁財天をまつりしし詞（九月七日）
五　御いとまたうべて帰帆をもよほす詞（十月上旬）

今更言うまでもないことだが、紀行文というのは、旅行中の出来事や見聞、感想などを記し、しばしば和歌や俳句、漢詩などを添えたものが多い。当然日時を追って記述され、時には時間を追っても記される。それ故に我が国

では紀行文は、土佐日記や更級日記、十六夜日記などがその典型であるが、しばしば「日記」と呼ばれる。上の各題詞でもわかるように、中巻の亡き人をとぶらう詞にしても、日時を追って書いていて、日レベルまで細かく記してはいないものの、典型的な紀行文になっている。

「思出草」の題は、最後の「御暇たうべて帰帆をもよほす詞」に「別にちかき馬のはなむけ、帰浪の名残にとぶらひ給ふ御たいめに、いさゝかのいとまもなけれど、思出草の末葉までも、ふしある事はもらすまじく思ふに云々」とあって、題名の由来は明らかである。薩摩での一年余りの出来事を後に思い出すよすがにと、心にとまることがあれば、枝葉末節（末葉）、つまらないことまでも漏らしてはならないと思って記したとしている。ところが評者の得無子は、「思出草ときこえし名は、いかさまにも、平貞直が、かひもなき和歌の浦半の藻汐草かきをくまでを思出にせん、と卑下せし御心ばへ成べし」と、「思出草」の題名の由来を平貞直の歌に求めている。歌は続後拾遺和歌集の一〇八三番歌である。勅撰集とはいえ盛命がそこまで典故を求めたかどうか。「思出にせん」だけなら他に三例もある。

二　作者毛起竜（識名盛命）のこと

盛命の家譜は見出されていないので詳しい経歴は分からないが、幸い沖縄毎日新聞に明治四二（一九〇九）年に「思出草」を翻字紹介したときに、冒頭「識名瑞雲伝」とあって、家譜から抜き出したと思われる伝記を紹介している。これによると、盛命は順治八年十月十九日生まれ、康熙五年四月二三日御書院里之子、同六年三月九日元服して下庫理里之子に転じ、翌年再び御書院里之子、同九年八月十五日二七才で黄冠に昇る。翌十年三月一日尚元王

百回忌の行事を監督して、十二年九月には宜野湾間切嘉数地頭になっている。これ以後通称嘉数親雲上（かかずぺーちん）と称したはずである。十五年には座敷位に、同二七年三月十二日に正議大夫蔡鐸とともに耳目官（進貢正使）に任じられて、その年の冬渡閩上京し、「聖祖実録」（康熙帝）によると翌二八年十月朔の条に、使者の要請で、接貢船についても免税を認めさせ、渡唐人も五十人増員することに成功している。能吏の一面も持っていたというべきである。

康熙二九年のこの年、福州琉球館に帰り着くと、前寅年の貢使越来親雲上、砂辺親雲上一行が未だ帰国できずにいた。この間に通事魏士哲平敷屋親雲上に兎唇の外科手術の法を学ばせ、帰国して王世孫尚益の麻酔手術に成功している。新聞はその功により紫冠（親方）に叙せられたとするが、貢使は帰国後直ちに上国する例で、世譜付巻には、進貢を首尾よくすませたことを報告するために、六月二八日薩州に到着、十月三十日に帰国している。これには「耳目官毛氏福地親雲上盛命」となっていて、通称が福地に変わっているだけで親雲上のままである。親方になったとすれば帰国後のことであろう。盛命はこの時が初めての上国になる。その後通称が嘉数、幸喜と変わっている。

ところで毎日新聞は続けて注目すべきことを述べている。すなわち「同（康熙）二十九年庚午六月一日薩州に使するや、帝都の事どもを聞き、何とかして西京江戸の状況を見んものと思へども、当時国々の関門堅く守りて、僧侶の外は容易に通行し難きを以て、瑞雲は剃髪して密かに西京に遊び、文物制度を視察し、和歌をも学びて帰国せり。此の思出草は其の時の著作なりと云ふ」（句読点は筆者）とあるのである。後述するように、この記事は幾つもの誤謬を含んでいるのであるが、その後これを受けた同様の記事が続く。真境名安興の『沖縄一千年史』（一九二三年）には、

沖縄人の手に成りし純文学として遺存せるものは、蓋し識名（親方）盛命（慶安四－正徳五）の思出草を以て嚆矢とす。彼は才識ありし篤学者にて、国文を研究せんと欲せしかども、当時諸国の関門堅く鎖されて、僧侶の外容易に通行し難きを知り、自ら剃髪して瑞雲と号し、窃に京都に遊行して国文和歌等を学びて帰国せり。此の思出草はその時の著述なるが、後に三司官に登用せられて政治上にも手腕を揮ひたり。

とある。伊波普猷も「『うるま』が琉球の古称に擬せられた経緯」（沖縄朝日昭和十年十一月十日～十三日四回、全集八所収）に、

沖縄人の手になった純和文の見本として、今遺ってゐる最古のものは、識名親方盛命（慶安四年－正徳五年）の『思出草』位のものであらう。識名親方は『おもろさうし』の校注者及び『混効験集』の編者の主なる一人としてもしられてゐるほどの篤学者で、元禄三年六月一日王命を奉じて上国した時親しく帝都及び江戸の状況を見ようと思ったが、当時は国々の関門堅く閉されて、僧侶以外の者は容易に通行することが出来なかったので、剃髪して瑞雲と号し、密かに帝都に入って文物制度を視察し、国文和歌をも学んで帰国した。『思出草』は実はこの時の日記であるが、彼は又政治的手腕をも有していたので、元禄十五年三司官に登用されたが（『沖縄一千年史』五八三頁－六〇五頁）云々。

恐らく、沖縄毎日新聞の「識名瑞雲伝」は当時同新聞社の記者をしていた真境名安興が匿名で発表したものであろう。彼の著書「一千年史」とも大きな相違がない。ところが伊波普猷は、これを全面的に受けいれたうえで、こ

うした優れた著書をものした盛命を過大に評価して、三司官の身分でありながら彼が実質奉行となって、『混効験集』の編集や『おもろさうし』の再編集までしたのだと拡大解釈したのである。王府は世譜や球陽の編纂、躍奉行や振舞奉行といった行事など様々なところで奉行制をしいて執行しているのであるが、三司官の一人が有能だからといって、奉行を退けて三司官が直轄する例があるのだろうか。万が一有ったとしても異例中の異例であって、これをいうからにはそれ相当の具体的な根拠を提供すべきであることはいうまでもない。

東恩納寛惇も「浦添家本伊勢物語について」で「混効験集というのは（中略）時の三司官（国務大臣）識名盛命主宰の下に編輯されたもの」「効験集の編集主任であった識名盛命は、一七〇二年から一七一四年まで在職、当代随一の和学者として知られ『思出草』の名著を遺して居り、編輯者の一人たる浦添良意は、一七一〇年から一七二八年まで十九年間やはり三司官職を勤めた人である」と、盛命の同僚三司官の一人浦添良意までも編纂者にしている。東恩納の「琉球古語辞典混効験集を中心にして」では『混効験集』の序文も「多分編輯主任たる識名盛命が書いたものであらう」としている。

仲原善忠も当初伊波普猷や東恩納寛惇を踏襲してきていたのであるが、『沖縄文化』十号（一九六三年）に「『思出草』について」を発表して、京都を旅行して国文・和歌等を学んで帰国したということは事実とは受け取れないこと、思出草には京都紀行を歌ったものがなく、すべて薩摩でのできごとであって、「伊波氏のいう元禄三年の京都漫遊説も作り話らしく、しかも、それに前行する真境名氏の説は全く雲をつかむ様な空漠たるもので、同氏は思出草を通読したとは思えない」と痛烈に批判している。

遅れて比嘉春潮は、一九六九年八月五日、連載中の「琢魚庵漫章」に「『混効験集』の編集奉行は松村按司なること」を発表して、

ふるいことで、日時はっきり覚えていないが、昭和十二三年の頃、東京で東恩納寛惇氏が、『混効験集』の編集には和文学に造詣深い「思出草」の著者三司官の識名盛命が参加していた。イヤ編集主任だったと突然言い出して人々を驚かした。同じく東京にいる伊波普猷もこれに同調し、その「混効験集解題」（昭和十三年七月二四日）の中に「本書の編集は序言の終りに列記してある通りの顔触れだが、とりわけ注目すべきは三司官の古参にして和学の研究者であった毛起竜識名親盛命である。」と書いている。これは全く伊波普猷氏が序文を読み違えたのであって、序文は前述の通り三司官の識名盛命が『混効験集』の編集に関係したとは一言半句も書いていない。

比嘉春潮の筆鋒もまた鋭い。実はこの頃、『混効験集』の編纂や『おもろさうし』再編のさいの按司奉行で、松村按司（津嘉山按司・国場按司）朝睦の家譜が見つかり活動が確認されたことによる。今日では中取（主取）クラスや筆者クラスの家譜も見つかっていて、三司官が実務に関与する余地がなかったことを証明している。実際『思出草』と『混効験集』両者の引用書目や下敷きにした文献を比較してみても、共通するものは殆どない。もし一人の人が主として編纂に係わっていたとすれば、引用書目にも共通するものが相当にあっていいのではないか。

外間守善は『混効験集　校本と研究』（一九七〇年）所収の「思出草」の解説で、真境名安興、東恩納寛惇、伊波普猷、比嘉春潮らの名を挙げた上で、「仲原先生が、識名が京都に行った形跡が見られないこと、『思出草』の内容に京都に関する記述がなく、すべて薩摩内でのことである、ことなど指摘して異を立てているくらいのものである」と述べただけで、立場を明確にしていないものの、『混効験集』を研究した著書に「思出草」を収めたところに、その立場は明らかである。

根拠のない誤謬の一つは、盛命が僧形に身をやつし「瑞雲」と名乗って京都視察をしたという、荒唐無稽の話から出発している。およそ士族が勝手に髪や髭を剃って出家することは許されぬことだったはずだが、まして王命を帯びて薩摩に滞在する使者が、こともあろうに出奔するなど、考えうることではない。また古来剃髪し髭を落とすのは、謝罪の姿勢でもあり、この世の外に身を置く謂でもあった。それ故盛命に僧形になる理由などあろうはずがない、空想である。

実は「瑞雲」は僧名ではない。どちらかというと法号で死後付けられるものである。家譜をみると父盛紀は「瑞和」、兄盛平は「瑞泉」、その子盛忠が「瑞模」という具合に、この時期の一族は法名の頭に「瑞」字を付けることになっていた。このことは中巻の追悼文をみるとよく分かる。古琉球以来支配層は大方禅宗を信仰し、家庭の仏事もそのように執り行っていた。それでも仮に僧になることは考えられないのである。

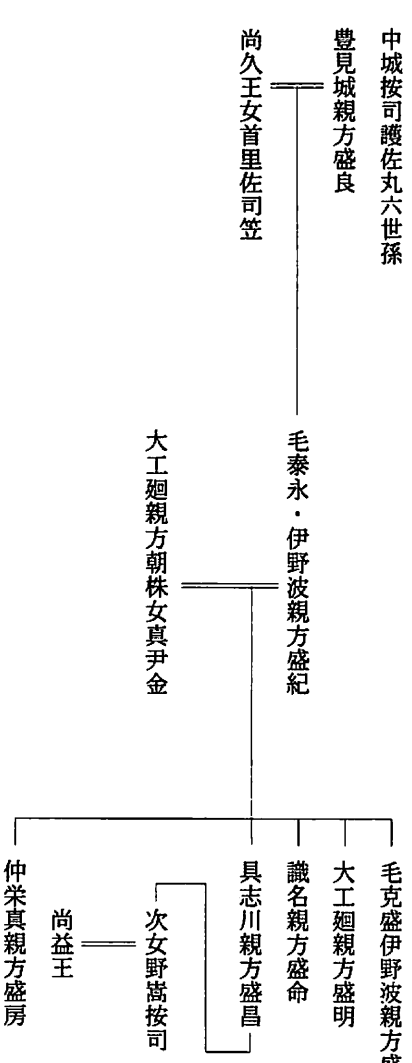
また盛命の長兄伊野波盛平を頓智話で有名なモーイ親方とした毎日新聞以来、このことに誰一人疑義を挟まないのも不審の一つで、事実を探究するこの場に提出するものではない。モーイ親方の頓智話は説話（昔話・伝説）であって、事実や史実として取り扱うべきものでないことは言うまでもない。

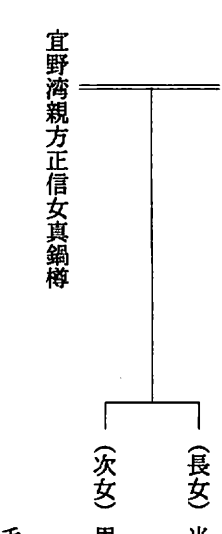
この背景には、盛命の力量に対する評価があったのではないか。一読すれば判るように、古典語の語彙の豊富さ、表現の確かさ、旅先での当意即妙の筆致、その実力の程は誰にも看取できる。雅文を自家薬籠中のものにしているのである。リズム感のある文体は自然で、文中には延喜式や万葉集のほか、古今集、後撰集、千載集、新古今集、玉葉集といった勅撰集、伊勢集や伊勢物語といった歌書、歌枕も漏らすことはない。白氏文集は和漢朗詠集からの引用であろうが、多用されている。平家物語や保元物語も見ているし、謡曲も諳じている。近世を通じて琉球では謡をし、事あれば細工能を興行したものだった。ヤマトへ使いする家の者としては、礼儀作法、茶道立花の立ち居

振る舞い、和歌和文の才能もそのために必要だったし、論孟や古文真宝、易経、史記などが確認できるが、いわゆる四書五経はこれらの人にとっては、基礎とも言うべき教養だったといってよい。意外なことは仏教に対する知識の深さで、仏教語や禅語が多用されているのも特徴の一つである。

帰国した年の康熙三九（一七〇〇）年兄盛平が三司官に昇っている。盛命自身も間もなく真和志間切識名の地頭となり、以後識名親方を称し、康熙四一年十月に三司官に任じられている。およそ十年この職にあって退役、二年後の康熙五四年十月二三日逝去している。大堂松原の墓に葬られたという。享年六五才だった。

本文理解のためここで盛命の家の系図を簡単に示す。





三　書　誌

ここで底本として使ったものは、上述の先達と同様東恩納寬惇旧蔵本で、現在沖縄県立図書館に収蔵されたものである。これ以前の写本は見出されていないので孤本といってよい。他に国頭盛栄筆写本の「思出草」が県立公文書館（沖縄史料編集所）にあるが、これは蕉雨亭筆写本を写したものである。

現在の東恩納旧蔵本は、後付けと思われる厚紙の表紙が付けられ、四目にかがられている。無題。次が元来の本表紙であろうが、結果として内題になっている。中央上やや左よりに「思出草」、左下に「蕉雨亭」とある。これを含めて墨付六七枚。縦二五、四㌢、横一八、〇㌢。一冊。保存状況は並、やや破れ、汚れ、疲みが見られる。一面七行、一行二七字前後。紙は正確には不明とすべきだろうが、楮紙かと思われる。本表紙の裏に、

此書は当家至て要用成（も）のに而候間、借渡一切無用可致、自然写取度者も候はゞ此元に而写取可為致者也。

付　近親類方心安とて輒借相渡候付、失却之基に候間、別而可入念候。

道光三年癸未三月　　毛光宗

子孫中

とある。内容は他人に対して貸し渡しや披見を戒めたものである。筆跡は本表紙の「蕉雨亭」と同筆。家譜を調べると、毛光宗という唐名の人は、盛命の兄の伊野波家の子孫に伊野波盛守なる人物がいるが、この人の生年月日がここに出ている「道光三年癸未三月」であって、これでは伊野波盛守と同一人物とは言えない。あるいは後の所有者である毛光宗が、蕉雨亭が書写したさい紛れ込んだとも考えられるが、すべて推測である。

筆写者である「蕉雨亭」は、他に東恩納寬惇旧蔵の『混効験集』にも見られる。後に付けたと思われる表紙には「混効験集　護得久大人校訂本」という題箋が貼られ、この裏に朱書で「護得久朝常大人自筆」とあって、その下に東恩納寬惇のものと思われる、同じく朱の書判がある。この『混効験集』はいろは順に並べ変えて便利に供したものだが、表紙に右から「明治四十年一月編輯／蕉雨亭／混効験集全」とある。さらに末尾には「明治四十年一月編輯／沖縄縣首里区山川／編輯者佐久本喜章／同上／同上　護得久朝常」と、佐久本喜章と護得久朝常を並べて書いている。つまり、こうした場合後ろの人物護得久朝常が主な編集者であることを意味している。その上その次の丁にも朱書で「護得久朝常大人自筆本也（書判）」とある。つまり蕉雨亭というのは護得久朝常その人のことである。

東恩納文庫にはもう一冊蕉雨亭の筆写したものがある。近世の文人達の和文を集めた「浮縄雅文集」というもので、罫紙に書かれている。紙も近代のもので、前掲の比嘉論文にもあったように、護得久朝常から東恩納寛惇に贈られたものである。

護得久朝常は歌人でも知られる護得久朝置の嗣子で、道光三十（一八四〇）年十月十一日生まれ、明治四三（一九一〇）年八月八日に死んでいる。宜湾朝保が編集した『沖縄集二編』（一八七六年）に六七首もの歌が収められている、父朝置とともに沖縄の代表的な歌人でもある。序にいうと、朝常の長子で国会議員になった護得久朝惟（一八六八～一九二三）が明治二四年に筆写した「平敷屋朝敏著作物語」（和書集）もあり、これも同時に東恩納寛惇の書庫に入ったものと推測される。蕉雨亭「思出草」を「識名盛命が所蔵していた原本である蓋然性」があると考える向きもあるが、これまで述べたように「原本」であるとは全く考えにくい。

蕉雨亭「思出草」の内部には誤字脱字も多く、この点でも原本ではありえないが、現状は得無子が見た「三冊」本でもない。

また本書には朱書原注がある。本文が草書なのに原注は楷書で、両者は書体が異なり、朝常のものか他のものの筆か判断できないでいる。

最後に評者の得無子についてであるが、跋文となった彼の文章によると、「いにし春の比」機会があって初めて対面して以来親しく交際するようになったと述べている。これは読後の文章なので、三番目の「村田氏のゑもん問より給ひし時の詞」の冒頭「弥生末の十日ばかり」や、次の「おなしぬしより茶会もようされし時の詞」の冒頭「春の末つかた、村田氏のゑもんなりける御方より、茶の湯の会もよほされ云々」に呼応し、村田氏であることを強く暗示している。外間注は「島津家の祐筆日高治左衛門為一か。当時の沖縄の和学者はみなこの人に師事した」

としているが、寡聞にしてこの例を知らない。無論「思出草」には日高の名は見えない。「思出草」には、村田氏のほか、野本、伊地知、岩切、林、平野、諏訪、上村などの名前を見ることができるが、波多江種一『薩摩歌壇の研究』や『国学者伝記集成』『名家伝記資料集』『和学者集覧』にも見えず、僅かにこの時期の村田平右衛門経寧だけが、幾つかの伝記と歌集『松操和歌集』に認められるだけである。あるいはこの村田経寧が「思出草」の村田氏ではないかと、目下のところ考えている。

〔参考文献〕

(真境名安興?)「思出草」沖縄毎日新聞明治四二年三月十七日～四月三日　十六回

真境名安興『沖縄一千年史』大正十二年　島倉竜治共著　全集第一巻所収

伊波普猷「『うるま』が琉球の古称に擬せられた経緯」昭和十年十一月十日～十三日　四回全集第八巻所収

伊波普猷「混効験集解題」『古琉球』改定初版　昭和十七年十月

東恩納寬惇「浦添家本伊勢物語について」文化沖縄三の五　昭和二六年十二月全集第八巻所収

東恩納寬惇「琉球古語辞典混効験集を中心として」拓殖大学論集十六号　昭和三三年四月

仲原善忠「『思出草』について」沖縄文化十号　昭和三八年

宮里朝光「混効験集の編集奉行松村按司とおもろ御双紙書きあらため奉行津嘉山按司について」球陽研究会「研究余滴」三号　昭和四二年十二月

渡口真清「混効験集の編者をめぐって」球陽研究会「研究余滴」五九号　昭和四四年五月

比嘉春潮「『混効験集』の編集奉行は松村按司なること」琉球新報昭和四四年八月五日全集第五巻所収

外間守善『混効験集　校本と研究』昭和四五年三月

池宮正治「識名盛命」『近世沖縄の肖像』上　昭和四七年九月

池宮正治「国場朝睦」『近世沖縄の肖像』上　昭和四七年九月

池宮正治『琉球古語辞典混効験集の研究』平成七年十一月

芳即正ら『鹿児島県の地名』日本歴史地名大系四七（平凡社）平成十年七月

池宮正治「座間味景典の家譜―『おもろさうし』『混効験集』の編者」首里城研究五号　平成十二年四月

凡例

一　翻字のさいは原則として旧漢字を新漢字に改めた。

一　適宜改行、段落、濁点、句読点を付けた。

一　明らかな脱字と思われる箇所には私に括弧（　）に入れて示した。

一　例えば謡曲の題名など括弧「　」に括って示した。

一　注釈を要する箇所については、番号をふり、各章の後ろに示した。

一　誤字脱字と思われる箇所についても番号をふり、各章の後ろに示した。

一　衍入と思われる文字または底本が誤っている場合傍らに「ママ」とした。

思出草

思出草上（巻）目録

おほやけの詔をうけて大和にわたりし詞
大隅の八幡宮霧島の御神に詣し記行
村田氏のゑもん問ひ寄給ひし時の詞
同じぬしより茶会を催されし時の詞
ある人花をめぐまれし時の詞
岩切氏のゑもん歌書をめぐまれし時の詞
吉野の原の駒率見にまかりし時の詞
林氏の兵衛手鑑を見せ給ひし時の詞
ある人うるま百合草を送られし時つかはしける詞
尚益の君王子御誕生を祝ひ奉る詞

おほやけの詔をうけて大和に渡りし詞

わが中山の天つ日つぎたえせぬ代々の例とて、年毎に迎ふる春の御ことぶきを、大和の君にとりたいまつり給ふる御使、今年は下官[1]つかふまつるべきよし、去年の夏詔あり。つかへ奉るひとおほかる中に、おろかなる身の、かゝる御使にさゝれしめいぼく[2]、世にかしこう思ふたまへて、すなはちかしこまり申し奉り、明行（く）年を待とる程、ちふりの神[3]のぬさは更にもいはず、さらぬあたりまでまうでゝ、遠き浪路の行末を祈るに、又紫巾官[4]の向氏なりける人は、東の都[5]東叡山根本中堂を、大樹[6]の命にて、国[7]の御守あらたにつくり立給ふるる（ママ）、そのいさをしごとなりたる御ことぶきの御使にさゝれて、同じ首途を祝ふに、かたじけなしや。

大君[8]、下官等が人やりの旅路、遠きつとめをねぎらひ給はんの御心ばへにて、御饗膳[9]を給るべきよしにて、めしあれば急ぎまうのぼるに、海に山にあさりし御[10]かしはべの御さかな数をつくし、御盃[11]もあまた度ずゝめぐりけるに、こたびしたがふつきぐ[12]のつかさまで、御ましちかくは[13]いらいし奉り、大みきながれて後、折しも今宵きこしめすべき試楽[14]をおほせて、糸竹[15]のしらべふしありて、聖の御世の風残り、げに上中下のこゝろをやはらげ、やう〳〵時うつりて、夜半[16]の皷数しければ、御いとまたうべて、人々まかでぬ。其後御使して品々のたまもの宿にみち、広き御恵、せばき袖につゝみあまれり。両王子[17]の御めぐみも又品[18]あり。

さて、御国の守吉貴[19]の君にさゝげ給ふ御[20]せうそこをわたさせ給ふに、そのさだまれるさはうあり。大君、南風の御殿に出御まし〳〵、うや〳〵しうき[21]やうざくにおこなはせ給ふ。両王子の君のも又かはらず、ついでありて例[22]のことそがず、誠におごそかなる御礼のあつき古代[23]にみゆ。さればにや、此国の君臣皆大学[24]に入て、読書礼待甚厚きよし、もろこしのふみにも記せりとなん。時代[25]にしたがふ道はかくこそあるべい[26]事と、肝に答へて拝し奉りき。

此日舟の乗初して、親しき一[27]ぞうの限りをつどひて、遠き門出のことぶき取て、追風待（つ）程、今年いかなる天の運びにや、水無月の半まで雨降つゞき、やう〳〵中の六日の朝、空晴れ、南の風吹たちければ、大和行の舟長ども数の纜をとくに、けふは此国のならはし、舟出をいめば[28]、そのつとめて、向氏のまうどゝ[29]、同じく那覇の港を出て、真帆[30]に追行、おほくの島々を余所に過て、七[31]の名ある嶋も跡になり、かの俊寛[32]僧都の恨を残せし硫黄の島、又竹嶋[33]はかしこなりといふほどより、俄にそらかき曇り、風つよく吹おこり、浪あらくたちさわぎけるを、船子どもは力を出し、中乗[34]の族は信心をこらして祈りししるしにや、船出して四日と覚えし巳[35]の時ばかりに、薩洲が[36]た山[37]川の津につきたり。

爰にて又風吹かはり、日数泊りて、やう〳〵文月三日に鹿児島[38]の城下にのぼり着、旅[39]のやどりに入ぬ。やがてその[40]の司のかたにあないとり申けるに、伝言ありて、葉月六日御城にまうのぼり、中山[41]のせうそこ、ほうもちどもさしあげ、御守の君を拝み奉り、次々の御かたにも、例のごと御使の人事[42]終ぬ。

同じき[43]月の中の四日は、中堂御造畢の御ことぶきとて、二の御丸にて御国のみさぶらひたち、上中下饗膳[44]奉られ、猿楽[45]の御ゆうあり。下官等、又は倍従のたれかれ、例のもらさせ給はず、めして見せ給ふるに、此時も御饗膳御茶など給はり、かしこさ身にあまりて、向氏[46]文氏[47]の二人ともに御檜重御酒をさゝげ奉りき。かゝるおほけなきかしこさは、わがぞうのめ[48]いぼくにも、つたへをかましくおまふまゝに、灯の本に書記し畢ぬ。

注

1　下官―原注「ヤツガレ」とある。「やつがれ」は自分を謙遜していうことば。わたくしめ。

2　つかふ―仕える。奉公する。

3　めいぼく－面目。世間に対する名誉。

4　ちふりの神－地触りの神。旅の海路または陸路を守護する神。

5　紫巾官の向氏なりける人－紫の冠を戴くつまり親方位の官人で、向氏の人。『中山世譜』付巻によると、「上野本堂の告成を賀す事の為に、向氏津嘉山親方朝虞を遣す」（読み下だす）とある。盛命と同船して来鹿している。

6　東の都－江戸のこと。西の京都に対していう。

7　東叡山根本中堂－上野寛永寺のこと。元禄十年七月将軍の命で修復を命じられ、二年後に完成している。国の上中下喜び「国中の士太夫に詩歌を献せしむ」（『西藩野史』）とある。

8　大樹－徳川将軍のこと。

9　国の御守－薩摩藩主。

10　大君－琉球国王。

11　御かしはべ－御膳部。調理をつかさどる部署、またそこに所属する人。首里城内の役所としては御料理座や大台所などがある。

12　ずんめぐり－順巡り。貴人から下に順々に盃がめぐること。「大通り」とも「御通り」ともいう。

13　はいらい－拝礼。貴人に頭をたれて祝言を述べること。

14　試楽をおほせて－舞楽の予行演習をお命じになって。

15　糸竹のしらべ－音楽を演奏すること。糸は弦楽器、竹は管楽器を意味する。

15　聖の御世－聖の御代。徳の高い人が天下を治めていた時代。

16　夜半の皷－深夜を告げる時の鼓。時報。漏刻ではかった時間を羯鼓を打って知らせ、さらに鐘を撞いて城下に

知らせた。

17 両王子－尚純と尚益。

18 品あり－身分等で差がある。

19 吉貴の君－二十一代藩主。「御国の守」とあるが、この時の当主は綱貴で、吉貴はその世子。

20 御せうそこ－御消息。書簡、手紙の敬語。国王から薩摩藩主への手紙で、首里城南殿で使者に授ける儀式があり、これを「御状渡し」という。儀式の概略は『琉球国由来記』「王城之公事」四月の「御状渡」に出ている。

21 きやうざくに－警策に。立ち居振る舞いがみごとに。

22 例のことそがず－これまでのしきたりを省略することなく。

23 古代－こだい。古風。昔風。古い時代。

24 大学－中国の明代清代に国子監に官生を送ったことをさすか。

25 時代にしたがふ道－古い時代の道徳や礼儀に従うということ。

26 あるべい事と－あるべき事と。「べい」は「べき」の音便。

27 一ぞう－一族。「ぞう」は「ぞく」の音便。

28 いめば－忌めば。忌むので。出航するには悪い日なので。

29 そのつとめて－翌日の早朝。

30 向氏のまうど－向氏の真人。前出の津嘉山親方朝虞のこと。「まうど」は「まひと」の音便。相手を尊んでいう語。

31 真帆に追行－まっしぐらに目的地に向かって航く。

32　七の名ある嶋－薩摩七島。トカラ列島の口之島、臥蛇島、中之島、平（たいら）島、諏訪之瀬島、悪石島、宝島（小宝島を含む）をいう。上り口説に「七島渡中もなだやすく」とあり、海の難所だった。なお十八世紀初頭の語彙集には七島を臥蛇・平良・悪石・諏訪之瀬・屋久島・坊としている。

33　俊寛僧都の恨を残せし硫黄の島－俊寛（一一四三年？～七九年？）は平氏討伐を謀議したことが露顕して藤原成経、平康頼ともに硫黄島に流され、二人は翌年中宮徳子の安産祈願のために恩赦されて帰洛したが、俊寛だけは許されず、同島で恨みを飲んで死んだ。『平家物語』「大納言死去」に鬼界ケ島を「島のなかに高き山有り、とこしなへに火燃ゆ。硫黄と言ふ物充ち満てり。かるが故に硫黄が島とも名付けたり」とあって、硫黄島を恐ろしい鬼の住む鬼界ケ島としている。『保元物語』や謡曲「俊寛」にも同様のことがみられる。僧都は僧正に次ぐ僧位。

34　竹嶋－竹島。硫黄島の東方八キロにある、周囲九・七キロの島で、東部に二二〇㍍の馬籠山がある。

35　中乗－船の中央に乗る人の意で船員以外の乗客のこと。

36　巳の時－午前十時ごろ。

37　薩洲がた－薩摩潟（さつまがた）。薩摩国の歌枕。特定の場所があるわけではない。上の平康頼の歌に「薩摩潟沖の小島に我ありと親には告げよ八重の潮風」というのがあり、『千載集』五四二番歌に採られ、『平家物語』「卒塔婆流」にも出ている。『古今集』四〇七番歌、小野篁の「わたの原八十嶋かけて漕ぎ出ぬと人には告げよあまの釣舟」を下敷きにしたものである。

38　山川の津－山川湊という。南薩摩揖宿郡山川町の要港。近世琉球船はまずこの港に入り船改めを終えて城下の前の浜に回航し、ここから上陸して琉球館に入った。

39 旅のやどり－旅の宿り。王府の出先機関である薩摩の琉球仮屋のこと。一七八四年以降は琉球館と称した。

40 その司のかた－琉球側と接触する役人のこと。琉球仮屋守といった。一七八四年琉球館と改めるとともに琉球館聞役と呼ぶようになる。

41 中山のせうそこほうもち－中山の消息と捧物。中山は琉球の別名。消息は手紙のことだが、ここでは国王から薩摩藩主に宛てたもので、琉球ではこれを特に「御状」といった。ほうもち（捧物）は、元来は神仏へ供えるもののことであるが、ここでは国王から藩主への送物のこと。

42 人事－じんじ。挨拶をとりかわし手土産を差し出すといったこと。

43 同じ月の中の四日－八月十四日。この日寛永寺修復完成の祝賀会があった。

44 みさぶらひ－御侍。藩主に仕える者たちの敬語。

45 饗膳－お祝いの御馳走の膳。

46 猿楽の御ゆう－能の上演。猿楽は「猿楽の能」のこと。御ゆうは「御遊」で演奏上演すること。「ゆう」は「いう」（遊）が正しい。

47 向氏文氏－向氏は注5の津嘉山親方朝虞、文氏は、原注に「文氏桃原親方常孝」とある人である。桃原親方は年頭使の前任者で、前年七月に上巍、盛命と交代してこの年の十一月三日に帰り着いている。

48 めいぼく－面目。名誉。対面。注3にも出る。

大隅の八幡宮霧島の御神に詣し記行

睦月の十日余四日の朝、同じこゝろの友どち有て、廻島の旅館を立出、小舟に真帆かけて大隅の正八幡宮にまうでけるに、けふは此社にかんづかさども参つどひて、望の夜のことぶきとて、例のことにて、神わざあなると語る人のあれば、よき折しもえにしありて参あひけるやと、喜び覚えて、みがきなせる玉の広前にぬかづく程、思ひよりけるまゝに、

みしめ縄かくるねがひやかはるらし
おなじあゆみをはこぶもろびと

延喜式には大隅国廻島の神社とかや、宇佐の御神崩りし給ふ御霊跡となん。そのつとめて、暮於郡霧嶋の御社に詣て、まづしはちの河にて御祓するとて、

御祓して世わたる道やいのらまし
しはちの川のきよきながれに

杉たてる山のさかしき坂を過て、御しめのうちにすゝむ程、世の塵もわすれて、ながき廊めいたる所をまうのぼりて、みてぐら奉るに、実に治れる世の霊跡なれば、万に神さびて、すせうさ肝にこたへ、つくりならべたるあま

たの神殿を拝み奉りて、

あめつちのひらけし世よりあとたれて
名も高知穂の宮ぞふりせぬ
君が代の末葉の御さかえを祈奉りて、
神と君と恵みある世や久かたの
そらものどけきひかりそふらむ

延喜式には宇都の神社とかや。御神は地神三代の瓊々杵尊、御女男二はしらの神、正殿にましくて、火々出見尊、[15]莵月不合尊御夫婦四柱は、相殿に祝ひ奉りしとなん。山を霧嶋といへるはいかなる故にや。

みねにみち霧[16]山嶋の夕ぎりや
世におほふ神のすがたなるらむ

暮かゝる程、雨そぼ降、[17]入相の鐘いとゞさびしき儘に、

春雨はくるゝ軒ば[18]にふる寺の
入あひのかねの声もさびしき

其夜は僧坊のうちにかりねし侍るに、院主いと情ふかくもてなし、[19]あるじまうけめづらかに、所につけたる興ありて、軒ばの梅さへ盛なるに、出入袖もにほひみちぬれば、

墨染のそでなつかしき梅が香や
こゝろの花のにほひなるらむ

[20]夜半の鐘を聞ていとゞねられぬ儘に、

旅まくらふけゆくそらのさびしきに
こゝろくだくる鐘の声かな

次日は、御神にかへり申し奉り、御寺を出て、[21]安楽の里のいで湯あみにゆく。聞にし里の名に負、温湯の心いときよげに、[22]両の仏の御国さへおぼえて、年頃の病の霧もはれぬべきこゝちし、されば、かりそめながら心とまりて、かゝる所にわが世も経まほしくおもふこゝろを、

何となくこゝろぞとまる里の名の
安く楽しむかりのまくらに

[23]犬飼の滝見にまかりて、

又もこんちぎりをむすべ山川の
　ながれのすゑのたきのしら糸

廿[24]三夜の月をまつとて、

みねたかきほどぞしらるゝ谷[25]の戸の
　軒にまちとる月のおそさに

此里に閑居し給ふ梅峰[26]和尚、悦堂長老などいへる僧にまみえ奉るに、たうとき法の文など、うらなく教きこえ給ひければ、かしこき（ママ）身にあまりて、

しらざりき浮世の外の山かげに
　かゝるみのりをけふきかんとは

かはらじなう[27]るまやまとゝ隔つとも
　こゝろの道と法のころもは

また、梅峰和尚へよみてたいまつりける。

萬代にふきもつたへよ咲にほふ
梅のみねよりおくるはるかぜ

此里を立出るとて同じ和尚へ、
まことあることのはぐさよわかれては
折ふしごとにさぞしのばまし

道すがら名残おほかるこゝろを、
わかれぢをいそぐとすれど行やらぬ
こゝろ[28]の駒のあとにひかれて

道のゆく手のさくら、かなたこなたに咲そめしを、
きえのこる雪かとぞ見るをちこちの
山にむら〳〵[29]にほふさくらを[30]

注

1　大隅の八幡宮－姶良郡隼人町にある鹿児島神宮（神社）のこと。旧官幣大社。大隅正八幡宮ともいった。主祭神は天津日高彦穂穂出見尊・豊玉比売尊・帯中比子尊・息長帯比売・品陀和気尊・中比売尊、これに八幡神が結

びつき古くは大隅正八幡ともいった。

2 旅館－薩摩琉球仮屋。

3 かんづかさ－「かみづかさ」の音便。神司。神祇官また神主、神官のこと。

4 望の夜のことぶき－一月十五日は小正月、この日七種の穀類を入れた粥を炊いて祝うとある（延喜式）。

5 神わざ－神業。神事。神楽。

6 みがきなせる玉の広前－装飾をほどこし玉のように美しい神前。神前（仏前）をほめる言い方。

7 宇佐の御神－大分県宇佐市の八幡神。神体は薦に覆われた巨石。

8 そのつとめて－次の日の早朝。

9 暮於郡霧嶋の御社－曽於郡霧島神宮。底本「暮於郡」は「曽於郡」の誤写。しかし霧島神宮は姶良郡にあり、したがって「曽於郡」は誤り。現霧島神宮。姶良郡霧島町田口にある。旧官幣大社。主祭神に天津日高彦火瓊瓊杵尊・木花開姫尊・彦火火出見尊・豊玉姫尊・鸕鷀草葺不合尊・玉依姫尊・神倭磐余彦尊を配す。

10 しはちの河－未詳。

11 御祓する－みそぎする。体を清めること。

12 御しめのうち－しめ縄のうち回された内、つまり神社の境内。

13 みてぐら－幣。神に捧げるものの総称。

14 すせうさ－殊勝さ。神妙奇特なこと。「しゅしょうさ」の直音化したもの。

15 莚月不合－「葺不合尊」とあるべきところ。うかやふきあわせずのみこと。「琉球神道記」も「フキアハセズ」とよむ。誤字のほか上に「うかや」と読む脱字があらんか。

16 霧山嶋－「霧嶋山」の誤りか。霧島山は北東部を宮崎県と接し、霧島連山、霧島連峰ともいい、主峰に韓国岳（一七〇〇㍍）、高千穂岳（一五七四㍍）がある。一般に霧島というと高千穂岳をさす。

17 入相の鐘－暮方につく鐘。

18 ふる寺－霧島神宮の別当華林寺のことか。真言宗。霧島山錫杖院と称する。本尊は十一面観音。

19 あるじまうけ－あるじとなって客をもてなすこと。饗応。

20 夜半の鐘－夜または夜更けに鳴らす鐘。厳密には夜半子といい、深夜子時（午前零時ごろ）に打ち鳴らす時の鐘のこと。

21 安楽の里－安楽温泉。姶良郡牧園町宿窪田村南端の天降川沿にある温泉。

22 両の仏の御国－仏教でいう両界。密教の金剛界と胎蔵界のことか。

23 犬飼の滝－姶良郡牧園町にある下中津川の有名な滝。

24 廿三夜の月－午前零時半頃に出る下弦の月。

25 谷の戸－谷の入り口。新続古今集に「春はまだ朝風寒き谷の戸に日影待ち得てうぐひすぞ鳴く」とある。

26 梅峰和尚、悦堂長老－琉球僧か。この時期までの宮古祥雲寺の住職に梅嶺西堂、悦堂西堂の名がみえる。

27 うるま－琉球を意味する雅語。もともとは新羅の迂陵島の人が漂着、そのいうことがよく理解できなかったところから、藤原公任が、返事をよこさない女に、揶揄して「おぼつかなうるまの島の人なれやわが恨むるをしらずがほなる」という歌を送ったことにはじまり、もともとは朝鮮の鬱陵島を指したが、連歌師紹巴が狭衣の注釈下紐（一五九〇年）で「琉球をうるまの島と云となり」と注したことから広く使われるようになる（伊波普猷「『うるま』が琉球の古称に擬せられた経緯」全集巻八）。元禄十五（一七〇二）年九月徳の島の任地で死亡した

薩摩藩士伊地知重張の歌にも「うるまの島にて神無月になき玉を祭るを見て」と詞書して「いつとても心の水のすむときは雲かくれにし月のやどれる」とよんでいる（波多江種一『薩摩歌壇の研究』）。盛命と同時代の薩摩でも、また奄美諸島の徳之島をもうるまと呼んでいる。下巻「御暇たうべて帰帆をもよほす詞」の注19参照。

28 こゝろの駒―仏教で煩悩の抑えがたいことを「意馬」といったことから出たもので、勇みはやる心をいう。

29 むら〳〵―あちこちまだらに。むらがって。

30 にほふ―色美しく映える。

村田氏のゑもん、問より給ひし時の詞

[1]弥生末の十日ばかり、[2]旅のかり屋いとゞつれ〴〵[3]侘る頃しも、村田氏のゑもんなりける[4]御事、同じ御こゝろの友どちひとりふたり、いざなひ（思ひ）かけずもとひより給ふは、いかさまにも[5]遠きをやはらぐる御心ばへにやと、いと情ふかくおぼえぬれど、[6]とりもあへぬ御あるじまうけふつゝかに、[7]さながら是も、[8]旅にしあれば椎の葉に、といひしむかしに習ひ、[10]こよろぎの磯にも求ず、たゞ、しづけきばかりをいたりにて、うちものがたらひ奉りしに、あるは[11]もろこしの聖の文のふかき道、あるは大和歌の[12]艶なる心を、[13]さきらありて、教きこえ給ひけるを、本よりさえなき身にも肝にしみて、御こゝろざしかしこう思ふ給ふる物から、むくひ奉らんふしもなければ、[14]難波のよしあしつゝばかりのへだてもをかず、[15]はて〳〵はくみかはして、わが[16]うるまの島のふしなき[17]糸竹のしらべなど、猶うるはしからぬも、折につきたる情なりと、[18]まれ人は興じ給ふなるべし。かゝる御こゝろの花にや、匂ひある御歌[19]一くさよみ給ひ、やつがれにも御返したいまつるべきよし、[20]わりなければ、いなびがたくて、

たづねよるこゝろのはなのいろみえて
にほひもふかしきみがことの葉[21]

注

1 弥生末の十日－三月三十日。
2 旅のかり屋－表向きは、旅行中に仮に泊まる宿の意だが、実際は琉球仮屋。仮屋は公館の意。
3 つれづれ侘る－退屈で侘しく。
4 御事－おこと。相手を親しんでいう語。おなた。そなた。
5 遠きをやはらぐる御心ばへ－遠くから来た者をいたわり安んじる心づかい。漢語の「柔遠」を和語に和らげたもの。
6 とりもあへぬ－急の。急ぎの。とりあえずの。
7 ふつゝかに－ゆきとどかない。いたらないで。気がきかないで。
8 さながら－ちょうど。
9 旅にしあれば椎の葉に－万葉集、有間皇子の歌「家にあれば笥に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る」による。
10 こよろぎの磯－「こよろぎの」は「磯」にかかる枕詞。また「こよろぎの磯」は神奈川県小田原市の大磯から国府津あたりまで海岸のことで（片桐洋一『歌枕歌ことば辞典』）、歌枕。なお、ここの磯は「いそ（急）」の意をこめていて、「磯にも求ず」は急ぎ求めることもせず、の意。

11 もろこしの聖の文ー和文でもろこしというと中国のこと。聖は徳の高い人のことで、孔子や孟子と言った儒家、儒教をいう。

12 艶なるー風情がある。つややかで美しい。

13 さきらー才気。才能。「ら」は接尾語。

14 難波のよしあしー難波江の葦（よし）、葦（あし）は古来和歌や物語に詠まれていて、これを背景にして「難波のよしあし」の句を同音から善し悪しの意に使っている。その前の「むくひ奉らんふし」の「ふし」も（好意に報いる）機会、折りの意だが、「節」の縁語としている。あとの「つゝばかりのへだて」の「つゝ」もおなじく、節と節との間の短い筒のように、少しの心の隔てもない意。

15 はてくーー果て果て。とどのつまり。最後。

16 うるまの島ーここでは琉球をさす。千載集、恋、藤原公任の歌に「おぼつかなうるまの島の人なれやわがことのはをしらぬがほなる」とあり、これが「うるまの島」の古いところである。この場合朝鮮の迂陵島（鬱陵島）のことであるが、里村紹巴の『狭衣物語』の注釈「下紐」（一五九〇年）で琉球としたのを初め、『和歌呉竹集』にも「うるまのしま国」に「りうきうの事也」と注され、盛命が「思出草」で多用し定着した感がある。

17 糸竹のしらべー管弦の調べ。音楽の演奏。ここでは琉球の三線音楽を演奏したということ。

18 まれ人ー客人。賓客。

19 一くさー一種。一首。

20 わりなければーしかたがないので。やむをえないので。

21 こゝろのはなー美しい心を花の美しさにたとえた語。

おなじぬしより茶会もようされし時の詞

春の末つかた、村田氏のゑもんなりける御方より茶の湯の会もよほされ、下官が旅のつれ〴〵をなぐさめ給はんとの御せうそこあり。身を浮草の根をたえさそふ水あらば、と思ふ折ふしのかしこさを伸て、その日を待とり、さし給へる時の鼓かず過さず、野本氏のまうどゝ腕をたづさへ問より奉りしに、日ごろうらなくかたらひきこえ給ふ伊地知氏、肥後氏なりける御二人も、同じくまうどのつらにて、かしこに待え給ふを、嬉しきたづきと覚えて、かたみにさきをゆづり、まづあなひすれば、御路地へときこゆ。各苔の細道を分入見るに、色々の木立物ふり、やゝ春のみどり添て、さながら山さとめきたり。いさゝか木陰に残る岩躑躅は暮行春のなごりを見せ、垣ねに栽し萩薄は、こん秋の錦を待にや。すへならべし踏石のついでつきぐしく、かこひなせる雛の便わざとめかず、燎の石こたいに、手水の鉢莓むして、さながら仙人の栖家におぼゆ。折しも春雨うちそゝぎて、梢の色ひとしほの緑をそへ、軒ばの露は玉をみがく。しばしやすらふ腰掛だに、かりそめながら心とまりて、かゝるやどりに世を経給ふたのしさいかばかりかはと、心のうちゆかしからずしもあらず。よき程に御あるじ立出給ひ、例の一らひありてしぞき給へば、独々やをら立入、くゞり戸ににじり上り、先床の上の御荘、炉のまはりのしつらいを見るに、いと清らに、そのかたの御調度ども、唐の大和のめづらかなる、いへばさら也。

扨会席、品あり。酒も二三べんずんながれて後、炉にひゞく松風浪の音にさけの酔をさまし、心をそゝぎて御手まへを見るに、かのすゝまずおくれず、趙洲三喫の禅味有。より合引わけ、利休一道の風骨みゆ。御茶をたうべては、盧同がいひけん孤悶を破、清き風ひやゝかに、仙霊にも通じつべくおぼえて、賓主のさはう事終れば、茶室の名残あれど、内のおましに席かはり、かたみに酒しねそし、むらいにかしこまりもおかず。三の糸のしらべなど興

に入て、げに帰さをも忘れたるに、夏菊[39]の色めづらかなるを、いけ給ふ竹の筒あり。こは此道に名高き小堀[40]の何がしきられたる、またなきものになん。年比ひめてもたまへど、別れて後の忘がたみにもとて、給ふるかしこさのあまりに、

筒にきる竹のよゝにもわすれめや
めぐむこゝろのはなのにほひは

御床に掛給ふは、和歌三神[41]の影なり。是狩野養ト[42]が筆にて、讃の色紙は、近衛[43]の殿下又何[44]の大納言とかや。やんごとなきみたりのかき給へるとなん、見るにたうとくおぼえて、おふぎ奉るこゝろを、

あふぎ見てけふやいのらん敷島[45]の
道しるべせし神のめぐみを

たまはりし竹の筒は、家に伝て、わがぞうの宝にもせまほしく思ふ心を、

呉竹[46]のよゝに伝てにほひある[47]
きみがめぐみはわすれざらまし

注

1 もようされし－「もよほされし」が正しい。催された。

2 身を浮草の根をたえ、さそふ水あらば－古今、小野小町の歌「わびぬれば身を浮草の根をたえてさそふ水あらばいなむとぞ思ふ」による。その詞書によると、文屋康秀が三河の国司の三等官になった時に、県見物に出掛けないかと、小町を誘った時の返事ということになっている。

3 かしこさ－かたじけなさ。もったいなさ。

4 さし給へる－あらかじめ指定した。

5 時の鼓かず過さず－時を告げる鼓の音も多く過ごすこともなく。指定していた時間にそれほど遅れることなく。

6 腕をたづさへ－手をとりあって。

7 まうどのつら－真人の連れ、仲間。ここの真人は村田氏。

8 かしこに－あそこに。村田氏のところに。

9 たづき－てがかり。

10 かたみに－かわるがわる、お互いにの意。

11 あなひ－案内。

12 路地－門から茶室にいたる通路。露路ともいう。

13 ついで－場面、全体の雰囲気。

14 つきづきしく－好ましい。感じよい。調和がとれている。

15 便－たより。具合。加減。

16 燎の石こたいに－かがりびの石も古風に。石灯籠がものふりていること。「こたい」は古代または古体。
17 苺－苔におなじ。
18 仙人－やまびと。山中に住み、不老不死の法を修め、神変自在の術を得たとするもの。せんにん。
19 かりそめながら－ほんの短い時間ながら。
20 やどり－村田氏のすまい、住宅。
21 心のうちゆかしがらずしもあらず－心中興味がわかないわけではない。わく。
22 くゞり戸－潜り戸。庭から茶室に入る狭い出入口。
23 御荘－おんかざり。床の飾り。軸物が巻いたまま飾られることがある。
24 しつらひ－飾りつけ。設備。調度。
25 そのかた－その方向。
26 いへばさら也－「いふもさらなり」に同じ。いまさら言うまでもない。もちろん。
27 手まへ－点前。点茶・炭置きの作法。
28 趙洲－趙州。唐代の禅僧（七七八～八九七）。真際大師。南泉普願の法嗣。趙州観音院に住す。「喫茶去」の偈で有名。
29 三喫－新旧三人の参禅者に「喫茶去」（お茶をどうぞ）とすすめた故事による。十七世紀半ば在番奉行として来琉したこともある諏訪杢右衛門の和文（『浮縄雅文集』所収）にも「趙州三潔（ママ）の禅云々」とある。
30 より合引わけ－大勢の人が集まったり離れたり。
31 利休一道の風骨－利休がいちずに打ち込んだ様子。

32 盧同－盧仝（？～八三五）。中唐の詩人。号は玉川子。

33 孤悶を破、清き風ひやゝかに、仙霊にも通じつべく－盧仝の「茶歌」（『古文真宝』歌類）に「一碗にして孤悶を破り（中略）、六碗にして仙霊通ず。（中略）両腋習習として清風生ずるを（下略）」とある。

34 資主－客と亭主。

35 しねそし－「しね」は稲の意、「そし」は疎食、全体として質素な茶会の会席料理をいうか。

36 むらいに－無礼に。不作法に。

37 かしこまりもおかず－遠慮もしないで。

38 三の糸のしらべ－三線の調べ。三線演奏。

39 夏菊－早咲きの菊。

40 小堀の何がし－小堀遠州（一五七九～一六四七）。江戸初期の茶人・造園家。茶道遠州流の祖。

41 和歌三神の影－和歌の守護神である三柱の神。柿本人麿・山部赤人・衣通姫（玉津島神）のほか異説がある。影（えい）は絵姿、肖像の意。

42 狩野養ト－狩野養朴常信（一六三六～一七〇八）。幕府の御用絵師。

43 近衛の殿下－近衛前久（一五三六～一六一二）かその子近衛信尹（一五六五～一六一四）であろう。二人とも関白の極位に登り、歌人で、書を能くした。

44 何の大納言－烏丸大納言光広（一五七九～一六三八）か。細川幽斎から古今伝授を受けた歌人。家集に「黄葉和歌集」がある。能書家としても知られる。

45 敷島の道－和歌の道。

46 呉竹の－枕詞。竹の節（よ）から「世」「世々」に掛けている。
47 にほひある－こまやかな心づかいがある。

ある人花をおくられし時の詞

弥生の末つかた、旅のかり屋いとさう[2]ぐしくて、同じうるまの友どち打つどひ、暮行春のなごりをかたらひ侍る比しも、日比うらなく物し給ひけるふたりみたりいざなひ、いろ〳〵の花を手折もて問より給ふ[3]御心ざしふかくそめてしなど、有がたう覚えて、先人事おはり、[5]かご瓶やうの物を出し、花を配してかたみに籤とりなどし侍り、をの〳〵手にまかせてうつし入給ふ。

さて、すへならべたる花、色をあらそひ、匂ひをまじへし気色、さながら雛の盛に見たらんにも露たがはず、いと興ある詠[6]めなりかし。殊更にもまらうどの心ありげにうつし給ふ釣[7]舟のはなは、夏菊の色めづらかなるに、青柳きこく[8]の枝など取まぜ、真帆かけて走たる俤を見せ給ひしは、いかさまに[9]もめぐる月日のうつりゆき、菊紅葉の秋にもなりなば、わが故郷に帰浪の名残をかけて、門に[10]おる柳の色ふかき御心ばへをうつし給ふるにやと、感にたへ侍り、取もあへぬ[11]あるじ、かの黄粱[12]が一炊になぞらへ、浮世の閑[13]をぬすみて、例のうらなく汲かはし、ふしなき糸竹のしらべなど興じて、更行までのまどゐ[14]に、御心ざしのかしこさを酔なきのまゝに、

たづねよるこゝろの水のふかき江に
くみてしらるゝひとのなさけは

注

1 旅のかり屋－旅の仮屋。琉球仮屋。後の薩摩琉球館のこと。

2 さうぐしくて－心さびしくて。何となく物足りなくて。することがなく暇で。

3 御心ざしふかくそめてし－古今集春上、よみ人しらずに「心ざしふかくそめてし折りければきえあへぬ雪の花と見ゆらむ」とある。

4 人事－じんじ。挨拶しおみやげを送ること。既出。

5 かご－籠。花籠のこと。

6 詠め－眺め。望み見る。

7 釣舟－釣舟の形をした竹の花入れ。

8 きこく－枳殻。からたちのこと。からたちの花は春咲く。

9 いかさまにも－ぜひ。なんとか。

10 おる－折るか。あるいは「おふる」（生ふる）の「ふ」脱か。

11 あるじ－「あるじまうけ」の略。人をもてなすこと。御馳走。

12 黄粱が一炊－「黄粱一炊の夢」のこと。盧生が邯鄲の宿屋で、主人が粟飯を炊いている短い時間に、富貴をきわめた一生の夢を見たという説話による。人生の短くはかないことの例え。「邯鄲の夢」「邯鄲の枕」「邯鄲夢の枕」ともいう。

13 閑をぬすみ－忙しいおりに暇をつくること。「ひまを偸む」こと。

14 まどゐ－丸居。円座。転じて宴会。集会。

岩切氏のゑもん歌書をめぐまれし時の詞

灌[1]仏の比、軒の梢わかやかにあをみわたり、花橘の匂ひもえならぬに、きのふけふは雨さへそぼふり、まだしき[2]声もきかばやなどうち詠めゐたる折しも、岩切氏のゑもんなりける御かたより、かの在家菩さちと聞え給ふ日新公[3][4]、前の御守貴久の君、又近衛竜山公[5]、いろはの文字四十七くさの御歌、中納言家久卿の君[6]、難波づ[7][8]の歌を冠にて詠じ給ふる三十一くさの御歌、これらをかきうつし給ふ筆のあとうるはしからねど、旅やかたのさびしきふしをもなぐさめ、かつは別れて後の忘れがたみにもとておこせ給ふ御心ばへ、いと情ふかくきもにこたへ、とる手も遅くいたゞき見奉るに、日新公の御歌の奥には、准[9][10]三宮の御そへ書に天が下のことはざを知侍らん教誡のはしとなるべきものにや、童蒙求我のたぐひならんかし。げにふかくねざせる心の程、かくあらはれぬることの葉は、呉竹の世々にも[11]稀なる事になんと有。此御歌どもを座右にかけ奉り、常にあふぎたうとみ、身を治め、心をみがく鏡ともし侍らば、わがごときかたは翁も、露ばかりは賢にうつるかたも有なんや。かつは家の子の庭[12][13][14]の教にも侍つべし。

さてこのゑもんなりける御事[15]よ、はやうよりわか武士のいさめる道のざえは更にもいはず、風月の情ふかく、八十年の今に及ぶ迄御身すこよかに物し給ひて、藤咲門の花のしなゐに、永き春日のつれ〴〵を忘れ、千種さく園生のむしの音に、秋のよのねざめをなぐさめ、世の塵をよそにはらひて、よろづやすらかにすごひ給へば、愛ながら[16][17]無可有の里におぼえて、をのづから千とせの坂をもこえ給ふべくぞ見えける。よの常恵ふかく、旅人をあはれみ給ひて、折節前栽の花をも手折こし給ふその御めぐみ大かたならぬに、かゝる金玉[18][19]の声あるたまものを、たゞにやはとて、

あふぐぞよめぐみもふかきことのはの
をしへをつたふみづくきのあと[20]

注

1 灌仏－四月八日の釈迦の誕生を祝う灌仏会のこと。花祭りとも。甘茶をそそぎかけて供養する。

2 まだしき声もきかばや－底本割注に「五月こば鳴もふりなんほとゝぎすまだしきほどの声もきかばや　伊勢」とある。伊勢集に「五月来ば鳴きも古りなむ郭公まだしき程の声を聞かばや」とある。古今集夏の部にもとられている。伊勢は藤原継蔭の女で、平安時代の著名な歌人。三十六歌仙。宇多天皇に寵愛された。伊勢の御。

3 在家菩さち－出家しないで在俗のまま菩薩の尊号を有するもの。

4 日新公－島津忠良（一四九二～一五六八）。十五代藩主貴久の父。十六代義久、十七代義弘はその孫。「いにしへの道を聞きても唱へてもわが行ひにせずばはかなし」ではじまる「日新公いろは歌」は、近世を通じて武士から庶民にいたるまで、子弟教育の指針とした。琉球にも伝えられている。

5 貴久－日新公忠良の長子島津貴久（一五一四～一五七一年）。十五代藩主。在位一五二六～一五七一年。

6 近衛竜山－近衛前久。竜山は号。既出。

7 家久－島津家久（一五七六～一六三八年）。十八代藩主。在位一六〇二～三八年。

8 難波づの歌を冠にて－難波津の歌というのは「難波津にさくやこのはな冬ごもりいまははるべとさくやこの花」のことで、源氏物語の若紫の巻に「まだ難波津をだにはかばかしう続けはべらめれば、かひなくなむ」とあって、幼いものが仮名書きの習字の最初とした。転じて初歩的入門の歌とし、この歌の三十一文字を頭にして三十一首

の道歌が詠まれた。

9 おこせ－送り。

10 准三宮－近衛前久のこと。三宮とは太皇太后宮、太皇后宮、皇后宮のことでこれに準じる位の称。

11 童蒙求我－易経の蒙卦にある句。「童蒙我を求む」。童蒙とは無知な初学者、道理にくらい者の意。古人の逸話を集めて児童の教訓の書とした「蒙求」はこれによったものである。

12 かたは翁－片端翁。不完全な翁。

13 賢にうつる－『論語』学而に「賢を賢として色に易ふ」とある。賢人を敬い、自分の顔色を改めつつしんで礼をつくす意で、これを底意としている。

14 庭の教－家庭での教育。庭訓の和訳。

15 御事－相手を親しんでいう語。おんみ。そなた。

16 ざえ－学問。技能。

17 風月の情－自然の風物を楽しむ心、感性。

18 無何有の里－むがうのさと。人為を加えない自然のままの地。煩わしいことのない世界。ユートピア。『荘子』逍遙遊に「無何有之郷」とある。『万葉集』巻十六に「心をし無何有の郷に置きたらばはこやの山を見まく近けむ」とある。

19 金玉の声－すぐれた詩歌・文章・音楽の形容。また他人の詩歌などをほめていう。「和漢朗詠集」に「遺文三十軸、軸々金玉声」とある。

20 みづくきのあと－水茎の跡。筆跡。手跡。

吉野の原の駒率見にまかりし詞

卯月十日余、例の事とて吉野[1]の御牧なる駒をとらせ給ふ事ありしに、御守[2]の御使とて島津の何がしの殿、何の奉行、くれ[3]のつかさ、又所々の串目[4]の奉行とて、わかきみさぶらひ[5]、馬鞍のかざりよのつねならず乗ならべ、さしも広き野はらの岡谷にみちて、一むれ〳〵の旗をすゝめて若駒を追せ給ふ。[6]その数いく千万といふ[7]ばかりなし。誠に面白き事の限り也とさそふ人有。されば過にし如月の比、か[8]の芳野の桜さかりなりしとき、花見にまかりなんと思ひしに、雨風うちつゞきて、やがてちりすぎ侍るよしを聞て、えまからざりし恨みもあるに、此[9]たよりすぐさず、せめては雪[10]と消にし跡の梢をだにみて、春の行衛を忍ばましとその日をまちとり、腕をたづさへて爰かしこを詠けるに、木々の梢あをみわたり、やゝ夏山のふかき緑になり行を見て、

桜花雪ときえにしあとながら
　しげるこずゑもむつまじきかな
茂り[11]おふおなじ青葉のかげながら
　さくらがもとに立やよらまし

草ふかき所に雉子のなくを聞て、

草がくれすむによしのゝ原とてや

しげみがおくにきゞす鳴らむ

やう〳〵御牧に分入見るに、そのあたりは桜もなくてたゞ広き野らにしあれば、

よしのてふ野辺はみながらたえまなく[12]
さくらのたねをまかましものを

さてたよりよき所に桟敷[13]有。いかさまにも御名代、奉行、頭人[14]をさうぜらるゝなるべし。その外つかさ〳〵[15]の幕の数、そのあたりにみちく[16]たり。是を見んとて老たるわかき袖をつらね、広き芝生を席にて所々つどひたるは、万をもかさねつらんとぞ見えし。やゝ時うつり、山のあなたなる尾上[17]よりあまたの旗をさしかざし、太山風に吹なびけ、思ひ〳〵にかけ出給ふる馬くらの荘[18]てる日にかゞやき、さしもにたけき野飼の駒をいくむれとなく追かけおひもどし、西東に馳ちがひ、おろ[19]のうちに追入給ひぬるを、わかき口[20]つきの者ども、わか駒をさもや[21]すらかにとらへける有様、まことに目を驚す計也。やう〳〵事果て立帰るに、つく〴〵とこの有様を思へば、蟻の如くにあつまりて、蜘の子をちらすに譬たがはず。世のさまかゝる事とふときもにこたへ、こゝらさわぎし諸人もいづちともなく立かへり、跡さびしくなり行を見て、

より来しもかへるもいづこ見し人の
あとなき野辺に夕風ぞふく

注

1　吉野の御牧－鹿児島市の中心部からおよそ十キロ、いまの吉野町にあった、周囲二十八キロの藩営の馬牧。毎年四月二才馬を取る行事があった。これを馬追いといった（平凡社　日本歴史地名大系47「鹿児島県の地名」）。

2　御守－薩摩藩主。

3　くれのつかさ－「くれ」は「何」と並べて用いられ、不定の人や物を示す代名詞。何の司（役人）。

4　串目－各郷村から民夫として集められ山野を走りまわり野馬を追う者のことで、時に一万人余もいたという。それらの者を串目立という。

5　わかきみさぶらひ－若い御侍。「みさぶらひ」は貴人に仕える従者の尊称。

6　その数いく千万－吉野の駒率の場合、実際は近世を通じて三〇〇～五〇〇匹くらいであった（「鹿児島県の地名」）。

7　いふばかりなし－ことばでは言い尽くせない。

8　かの芳野の桜－あの桜で有名な吉野の桜。

9　此たよりすぐさず－吉野の馬追い見物に誘ってくれたことをやりすごさないで。

10　雪ときえにし－（桜の花が）雪のように消えてしまった。

11　茂りおふおなじ青葉のかげながらさくらがもとに立やよらまし－どの木々も同じように青々としげっているのであるが、同じことなら桜の木の下に立ち寄りたいものだ。桜の花を見られなかったことを惜しみつつ、なお桜に思いを寄せている。この歌は、初句が「しげり行」となって、宜湾朝保が選んだ『沖縄集』（沖縄三十六歌仙）にもとられている。

12 よしのてふ野辺はみながらたえまなくさくらのたねをまかましものを―この牧は桜の名所と同じく吉野というのに桜の木が一本もない。この山の全域に絶えることなく桜の種を播きたいものだ。

13 桟敷―見物のために一段高く設ける床。吉野の馬追いには多くの桟敷が設けられた。

14 頭人―祭礼や行事を主宰したりして働く人。

15 さうぜらるゝ―請うぜらるる。招待される。招かれる。

16 尾上―をのへ。峯の上。山のいただき。

17 太山風―未詳。太山の「太」は「大」の誤写か。おほやまおろし。山から吹き襲う大きな風、強い風。

18 荘―かざり。飾り。

19 おろ―おり（樏）の方言。「牧場の一隅を又囲って、そこに野馬を集めて取るやうに構へた場所を、南九州では一般にオロと謂ひ、苙といふ文字をあてて居る」（柳田国男編「分類農村語彙」）。

20 口つきの者―牛馬の口を取って引く者。

21 やすらかに―容易なさまに。

林氏の兵衛手鑑を見せ給ひし時の詞

卯花月[1]のさがりに、林氏の兵衛なりける御かたより旅のつれ〴〵をなぐさめ給はんの御心とて、年比櫃[2]にひめて、かこい置給へるふるき手鑑[3]、珍らかなる巾[4]して表紙かけたり。古代に見所あるをあまたよそひ、御せうそこ添て送り給ふ。先御心よせのかしこさ、みたびいたゞきて開きみるに、世々の帝のたへなる宸筆[5]を始、雲の上や星[6]の林の

はへあるかずぐのかんな文字、たうとき聖だつ権者のまんな、あるはたけき武士、（た）えなる女の筆の跡、あるは和歌の浦にひろへる玉の光をのこせし筆の林に、手折れる花の匂ひをふくみ、遠き近きをいはず、いくらと言数をしらず。あつめ給へる短冊、色紙、経、陀羅尼、歌まくらのはしぐなるべし。誠に稀なる世の見ものなりかし。おろかなる身にはかゝる御恵みのゑにしならずば、いかでかはと思ふに、千尋の海あさく、かつは浮木にあへる亀に覚え、百さかの山ひきく、ひまに咲花見たらんこゝちして、折返し巻返して日をさへ重ね侍りし怠、こゝにはいかにその恐れもあればと思ふばかりを、

あふぐぞよわかれて遠きいにしへの
ながれを見する水くきのあと

注

1 卯花月のさがりに―陰暦四月の過ぎた頃に。卯花月はたんに卯月ともいい、四月の異名。「さがり」は時期がすぎること。
2 櫃―ふたのついた大型の箱。
3 かこい―かこひ。蓄えて。秘蔵して。
4 手鑑―古人の筆跡や写経の断片などを集めて帖としたもの。
5 巾―切れ。裂れ。ここでは錦や緞子といったもの。
6 古代に―古めかしく。古風に。

7　宸筆―天皇の筆跡。

8　雲の上―雲の上人。天皇を始め宮中に仕える人々のこと。狭くは、五位以上の、蔵人にあっては六位以上の昇殿をゆるされた殿上人。

9　星の林―星の位の林。星の位というのは三公また宮中に列する公卿、殿上人のこと。

10　はへある―華やかな。

11　たうとき聖だつ権者―尊くいかにも徳の高いお坊さんらしい高僧。

12　まんな―真字。真名。漢字のこと。

13　たけき武士―たけきもののふ。勇ましい武人。

14　(た)えなる―妙なる。上手な。巧妙な。

15　和歌の浦にひろへる玉の光―紀伊の国の和歌の浦で拾った玉のように美しい和歌の手鑑。和歌では、和歌の浦から「玉藻刈る」とか、玉藻を拾うかたちで多く出ている。藻に詩歌文章の意があるからで、玉藻はその優れたもの。

16　手折れる花―おちこちからあつめた手鑑を、手折ってきた花にたとえる。

17　陀羅尼―梵語の呪文で梵語のまま読み上げるもの。

18　歌まくら―歌枕。古くからよく詠まれた名所(を詠んだ歌)。

19　百さかの山ひきく―もも尺の山も低く。高い山も低く。「もも」は数が多いこと。

20　ひまに―すき間に。

21　怠―おこたり。不用意な失敗。過失を詫びる気持ちもある。

ある人うるまゆり[1]を送られける時つかはしける詞

いにし日は御前栽のうるまゆり今を盛なるよしにて、匂ひことにふかきを折せ給ひ、こは故郷の花といへば、馴し色香も猶床しくや詠はべらんとて、おこせ給ふ御せうそこの奥に、

見るやさぞ花の色香もいまさらに
ふるさといとゞこひしかるべき

となん有ける。げにや旅の習ひ、おほやけわたくしにつけて、事[3]とある時しもあれ、ともすれば故郷のかたのみ心にかゝりて、わりならぬ北の国よりうつしこし花橘のにほひにも、薫風自南来とおぼめく[6]折しも、かゝる御たまものを見るより、袖にうつりて、ふとおもひいづるゆかりおほく、心ときめく物から、かゝるめでたき花をおしともはぶき給はで、下官がために手折こし給ふ御心ざし、色より香よりふかきみめぐみと、かしこう身にしみて、

手折こす君がこゝろのはなに猶
にほひをそふるゆりのひとふさ

注

1　うるまゆり―未詳。琉球列島に自生するテッポウユリのことか。

2　詠はべらん－物思いにしずんでぼんやりみるでありましょう。
3　事とある時しもあれ－いざという事態がある場合には。
4　わりならぬ－どこのものともよくわらない。
5　薫風自南来－薫風は南より来る。『古文真宝』蘇東坡の詩に柳公権が足した詩句に「薫風自南来　殿閣生微涼」とある。
6　おぼめく－いぶかしく思う。
7　手折こし－たをりこし。手で折って持ってきた。

尚益の君王子御誕生を祝ひ奉る詞

爰に毛氏の耳目官なりける人、をとゝし大清の帝へ御貢物の使にさゝれて、千里の浪路を経てわたらひ、今年皐月の末つかた、錦の袖を飜し侍りしが、その事ども例の啓せられんためとて、又此国にまうのぼる道滞ず、けふしも山川の津に舟よせしせうそこ、文月朔日に聞えぬ。今年はうるまの舟さいつころわたりきて、故郷の何くれこまかにはきこえねれど、文のたよりおぼつかなみに、下り侍りし折しも、こたび唐のうるまのかはりたるふしどもあり。中にも太子尚益の君へめづらかなる玉のをのこみこにて御誕生ましく、国の上中下、千代万代を唱て、御ことぶきとり奉りけるとなん。下官ら同じ旅ねの友は更にもいはず、うるまの御恵にかゝる御館の族、をのくのこらずわが旅居につどひて、喜びほこりて賀し奉るまゝ、御さかなよろぎのいそぎもとめて、大みきしねそし、果々はたふとこり人ぞなど、興に入て玉簾あくるもしらずいどみかはす。

さて、臣たるの道、おほやけの禄をはみて身を安きに置、飢ずさむからぬ御恵をうけては君に身を奉り、かつは御末葉のさかえをも祈奉らぬは、天の掟にもそむきぬべき例なるに、中にも尚益[12]の君、今[13]の王子も、わが一本のゆかりある毛氏准法司盛貞[14]の御娘の君の御腹、此外戚がわかんど[15]をりなりかし。又をとうとに物しける紫巾官盛昌[16]が娘の君の御腹に生れ給ふといへば、此君[17]一年[18]入内[19]ありし時、うちとの[20]事を下官とりつかふまつるべきよし詔をうけて、万にけいめい[21]し奉りしかひ有て、わが門[22]の中にかゝる千尋の陰さへ添ぬれば、夏冬のかくれ所にも頼奉るべく、かつは我ぞうの幸ひ思ひしられぬ。たゞ此折につかへ奉らば、御[23]てゝともよばれ奉り、五夜七夜[24]の御うぶ養ひにももるまじき物をと、思ふ一ふしのみぞあかぬ事なる。御流[25]は爰ながらも御千世を祝ひ奉る心ざしばかりとて、

生初るふた葉のまつの千代の後
　木たかきすゑをかけてちぎらん

鶴亀に千代万世も友なひて
　よもぎ[26]が島を君はしらなん

思出草　上巻終

注

1　尚益の君－この右肩に原注「元禄十三年六月十九日尚敬誕生」とある。元禄十三（一七〇〇）年は尚貞王の三十二年。当時は尚純が世子、尚益が世孫で、尚敬は曽孫にあたる。

2　毛氏の耳目官－王府行政の中心である評定所の申口衆のことを漢訳して「耳目官」という。毛氏は原注に「毛九経」とある。中山世譜付巻に、この年「進貢使の回国を稟報することの為耳目官毛氏野里親雲上安常を遣す。六月薩州に到り、十月十八日国に回る」とある。

3　錦の袖を翻し侍りし－成功（出世）してかがやかしく郷里に帰ること。「衣錦還郷」（錦を衣て郷に還る）等による。

4　啓せられん－「啓す」は天皇や皇太子に申し上げる意だがここでは薩摩藩庁への報告の意。中国へ使いした耳目官（使者）は帰国して間もなく上国して報告するきまりである。

5　聞えぬ－（手紙を）差し上げた、意だが、ここでは安常から盛命へ届けられた意であろう。

6　おぼつかなみに－覚束ないので。「なみ」に浪を掛ける。

7　ことぶき－ことばに出して祝うこと。

8　こよろぎの－枕詞。小余綾の。「急ぎ」「磯」にかかる。

9　はたふとこり人－身分の高い人。

10　玉簾あくるもしらず－伊勢集に「長恨歌の屏風を亭子院のみかどかゝせ給ひてその所々詠ませ給ひける、みかどの御にして」と詞書して、「玉簾あくるも知らで寝しものを夢にも見じとゆめおもひきや」とある。伊勢の歌として続後拾遺集巻十七にも出る。

11　末葉－王の子孫。

12　尚益の君－尚純の長子。第二尚氏第十二代の国王（在位一七一〇～一二）。

13　今の王子－世子尚純。一六六〇～一七〇六。冊封を受けないで死没。

14 毛氏准法司盛貞の御娘－盛貞は「盛員」の誤写。原注にも「尚純王妃毛氏座喜味親方盛員女（世譜）」とある。准法司は三司官待遇の意で、三司官座敷という。尚純は即位しなかったが追称して尚純王とし妃も王妃を称している。家譜によると、父盛員は崇禎十二年生まれ、父の跡を継いで康熙九年以降座喜味を称し、同十三年に親方、同二十二年に三司官座敷、吉報があったこの年の翌年には読谷山親方を称している。同四十四年没。王妃はその次女。童名思戸金。康熙三（一六六四）年生まれ、雍正元（一七二三）年没。

15 わかんどをり－わかんどほり。ここでは、王の血統、王の一族。

16 紫巾官盛昌が娘－原注に「尚益王妃毛氏具志川親方盛昌女（世譜）」とある。盛昌の生没年未詳。盛命の次弟。その娘真鶴金は康熙十九（一六八〇）年生まれ。乾隆三十（一七六五）年没。尚敬王の母。

17 此君－尚益王妃真鶴金。

18 一年－先年。ある年。

19 入内－じゅだい。婚儀をすませて大内原にはいること。

20 うちと－内と外。表と裏。

21 けいめい－経営。全力をあげて営むこと。

22 わが門の中にかゝる千尋の陰さへ添ぬれば、夏冬のかくれ所にも頼奉るべく－原注「伊勢物語　貞数親王生れ給ふ時、我門に千尋有陰をうゑつれば夏冬誰かかくれざるべき」とある。伊勢物語七十九段、「氏のなかに親王うまれ給へりけり。御産屋に、人々歌よみけり。御祖父がたなりける翁のよめる」とあって右の歌がある。ここの親王の母は在原行平の女更衣文子、御祖父が父親の行平、翁は行平の弟業平である。この場面にことよせて一族の繁栄に望みをかけている。

23 御てゝ－御父。

24 五夜七夜の御うぶ養ひ－赤子が生まれて三日五日七日九日の夜に行われる祝宴。親族縁者から衣服や食物などが贈られる。

25 御流－おながれ。お祝いの盃が経めぐって。

26 よもぎが島－蓬莱山を雅語にしたもの。歌ことばとしてはわずかに、新千載に「音にきくよもぎが島による浪の」（上句）とあるのみである。蓬莱山は中国の神仙譚に出てくる山で、東海中にあり仙人の住む霊山。これにかけて尚敬の長寿をことほいでいる。

思出草中巻目録

国母の薨御をいたみ奉る詞

亡父の十三回忌をとぶらふ詞

身まかりし娘の三回忌をとぶらふ詞

亡母をとぶらふ詞

国母[1]の薨御をいたみ奉る詞

去年の夏より廼府のかり[2]殿にありて、宇留間には千里の浪路を隔、行かふ舟の便もさだまれる折あれば、常はお

ぼつかなくも、郷思ふのみ胸にせまりて、むなしく今年に明ぬ。春の末つかたより、かへる雁[3]の翅にかけてやなど、待わたり侍しに、春上りの舟もみえず、やうく[4]かほれる風吹たち、旅居の殿閣、微涼を待ほど、水無月朔日の暮にや、今年の御使、丸がかはりにさゝれて、翁[5]氏の真人此国に詣くとて、山川の津につきたる舟のせうそこあり。いそぎひらき見るに、君ゆたかに、御一ぞうやすくおはしまし、国とみ、風やはらかに、丸が家人したしき限、みな事なしに、何事もよくなりぬときこえ給へば、喜びにたへで、いさみ物しけるに、又二日三日ばかり隔て後、山川の便きたり、国の御母君、去年の冬の末つかた、あつ[6]しく物し給ひしに、君おどろく[7]しうけうじつかへ給ひ、御薬、ずは[8]う、数をつくし給へど、補瀉温涼の匙[9]たえ、譲謝禁厭ののりつきて、終に花咲春をも待あへず、雲[10]がくれ給ひしとなん。御齢は七十に一とせばかりや余り給ひけん。この訃音をきくより、誰もく[11]胸うちつぶれ、悲みの泪[12]きりふたがりて、各かき籠[13]、藤[14]の衣にやつ[15]して、明ぬ夜となりぬ。

扨、此君の御み[17]さをよ、御かたち世にうるはしう[18]うたけて、はやうより御心ばへし[19][20]はうに御いつくしみふかく、民をなで、世をまつりごち給ふ大やけのかたにも、さとくかしこうおはして、宮の中、法[23]おきては更にもいはず、あかりさうじ[24]のやぶれをも手づから補せ給ひ、万にこと[25]そぎ、下の奉り物もおろそ[26]かなるを本とはぶき、唐土、大和の聖[27]の道をも慕ひ給ひ、有職[28]のかたゆをびかに、すべて世の鑑とあふぎ奉りしが、さいつ比にや、尚益の公御婚礼ありし時、下官等におほせて、その道の礼をうけ[29]ばり、とりおこなひ侍りし時、古代の例ども[30]をかうがへ奉るに、いぶかしき[31]ふしおほく、何くれとたど[32]たどしければ、心ゆ[33]かぬすぢめをしるしてうかゞひ奉るを、やぐら[34]の官とり申され、此君に[35]問奉り給ふるに、残る[36]木隠もなく明らめきこえ給ひて、露ばかりのくまもなくて、さ[37]うなく事なり飛。さる物から、よの常女の髪ゆひ、上裳下もの色あひ、裁ぬひ、うみつむぎのはかなき業まで、いたりふかう物し給ひ、君に親にもきせすゝめ奉る道、あるは、わかき老たるをめしつかふる品[38]、あるは礼儀威儀の定れる数々を

もけ[39]しうはあらず、わかき君達にも教へ物し給ひしを、末の世にもかゝる光のあらはれ給へる事と、国[40]ゆすりてあふぎたいまつりしに、限りあるよの習ひのみぞうらめしかりける。去年の夏、丸が旅の門出をねぎらひ給ひて、品々の御たまもの今はなきみよの忘がたみとは、けふぞ思ひしられき。泪[41]に浮ぶ藻くづとはかゝる御たま物なるべし。かけ[42]まくもかしこけれども、御追悼の心ざしにばかりとて、

千代ふべき松にたぐへて祈りこし
　かひもなきよとなりにけるかな
入はつる夕日につれし君やいま
　にしの御くにゝ影をとむらむ
むらさきの雲に隠れし夕月の
　あとは闇なる世とたどるらむ

右[43]御詞中にもよく調、感ふかくきこえ申候歟。

注

1　国母－原注に「尚質王妃美里按司加那志　童名真松金　羽地王子朝泰女　康熙三十八年（元禄十二）十二月廿一日薨　寿七十一」とある。崇禎二（一六二九）年四月朔日生まれ。号は栢窓。玉陵に葬られる。尚貞王の母。

2　かり殿－仮殿。後の琉球館のこと。

3　かへる雁の翅－春になり北方へ帰る雁の翼。蘇軾の詩に「醒来送帰雁」とあり、和歌の古いところでは、古今集の春歌上、伊勢の歌に「帰雁をよめる」と題して「はるがすみたつを見すてゆくかりは花なきさとにすみやならへる」とある。

4　かほれる風吹たち旅居の殿閣微涼－原注に「蕙風自南来、殿閣生微涼」とある。前出。「ある人うるまゆりを送られける時つかはしける詞」注5参照。

5　翁氏の真人－原注に「翁氏佐久間親方忠祐」とある。盛命の後任の年頭使に任命された人。「中山世譜付巻」には「(康熙)三十九年為年頭使事、遣翁氏佐久真親方忠祐、六月初八日、到薩州、翌年十一月初二日回国」とある。

6　あつしく－病気が重く。危篤の状態で。

7　君おどろくしうけうじつかへ－息子である国王尚貞は、物凄く孝行を尽くし。「けうじ」は「孝じ」でサ変動詞。親孝行をする。また死んだ親の供養をする意もある。

8　ずはう－「ずほふ」が正しい。修法。加持祈祷をすること。「しゅほふ」ともいう。

9　補漉温涼の匙たえ、禳謝禁厭ののり－出所未詳。前の「御薬、ずはう」の意を繰り返したもの。補ったり下したり、温めたり冷やしたりする医療と、汚れを払って神に感謝しまじない加持祈祷をすること。

10　雲がくれ－雲に隠れる意から転じて、貴人の死ぬことをいう。

11　胸うちつぶれ－悲しみで心がひどく乱れて。

12　きりふたがり－霧で目の前がふさがる意から、(涙で)くもって見えない状態になって。

13　かき籠－かきこもり。「かき」は接頭語。家や部屋から出ないでとじこもること。

14 藤の衣－藤衣（ふぢごろも）。葛の繊維で織った貧しい着物。身分の低い者が着た。転じて喪服。琉球では芭蕉の白衣、冠帯とも白い喪服を着て喪に服した。

15 やつし－みすぼらしい姿に変えて。

16 明ぬ夜－夜が明けない夜で、暗闇の意。ここでは国王が喪に服する期間をいう「諒闇」をやわらげたもの。

17 みさをよ－操よ。みさをは心を変えないで志を堅く守ること。貞節。「よ」は間投助詞。

18 うるはしう－「うるはしく」の音便。気高いまでに美しく。

19 らうたけて－労猛て。骨身を惜しまないで。経験豊富で。

20 しはうに－四方に。周りに。

21 まつりごち－まつりごと、政治を執り行い。

22 さとくかしこう－聡く賢く。利口で思慮深く。

23 法おきて－決め事、定め事。似たようなことばを並べたもの。宮中での仕来りなど。

24 あかりさうじ－明り障子。外の明りをとるために紙を一重にはった障子。今の障子。

25 ことそぎ－事削ぎ。事殺ぎ。質素にして。省いて。

26 おろそかなる－簡素なる。

27 聖の道－徳の高い人、聖人、優れた人の教え。

28 有職のかたゆをびかに－教養の面でも広々として。「ゆをびか」は「ゆほびか」が正しい。

29 うけばり－受け張り。自分だけで引き受け、思う存分に振る舞う。

30 かうがへ－かんがへ（考え）の音便。

31 いぶかしき－疑わしい。不審である。
32 たどたどし－はかどらない。
33 心ゆかぬ－気に入らない。満足しない。
34 やぐらの官－未詳。城内の儀礼を執り行い、内宮（内原）の女性と接触できる司は双紙庫理しかない。これを和語にやわらげたか。
35 此君－国母のこと。
36 残る木隠もなく－木に隠れて見えないところとてなく。
37 さうなく－左右なく。たやすく。考えるまでもなく。
38 品－ふるまい。態度。
39 けしうはあらず－変ではなく。さしつかえなく。
40 国ゆすりて－国中騒き騒いで。
41 泪に浮ぶ藻くづ－涙の海に浮かぶ藻屑。原注に「なきあとのかたみとて社とゞめけめ泪にうかぶもくづ也けり」とある。この歌、初句が「あふまでの」とあって、古今集恋の部に興風の歌として出ている。裳を脱ぎ捨ててあたふたと出ていった女に宛てたもので、「もくづ」に涙のたねとなった裳をかけている。
42 かけまくもかしこけれ－言葉に出して言うのも恐れ多い。
43 盛命が批評を乞うた得無子の評語。

亡父の十三回忌をとぶらふ詞

去し大和の貞享五年つちのへ辰の文月七日、暁の雲を嶺にのこして、此えぶのさかひを行わかれ給ひし亡父の御面影どもつと立添給ひ、折ふしごとの庭の御訓、なをき詞の露わするゝふしもなきに、昨日けふと過行隙の駒は、水こふ人もなきに、みなみ早く過て十余三とせの秋になりぬ。いとゞしく虫のなく音に催れ、萩の下露をそへて、けふは猶しほれがちなる旅やかたに、故郷の空も恋しく、あはれはらからの人々うやくしう追膳取まかなひ、経仏のくやう、ことそがずつかうまつらんばや。下官はひとりみやうがふの糸心ほそく、かの椎の葉の露ばかりを手向にて、わが中山の梵客、参禅のために渡て物し侍るを、さうじて花奉り、御経ずし、心ざし計はませし世のごと、けいめいし奉れど、旅の筵のせばきのみぞ、しき忍ぶにも余りありけり。

扨、その遠つ親を尋ね奉るに、そのかみ中城按司護佐丸正統の末葉、前の法司官豊見城親方瑞養居士の二男、伊野波親方盛紀瑞和居士とぞ申ける。御母公は先王尚豊の君の御妹に、首里佐司笠王子の御腹に生れ給ふ。いはけなかりし齢より君のおましちかくつかへ奉り給ひしに、二葉よりかうばしき山口しるくみそなはし給ひて、世にたぐひなうむつれまつはし給ふ。やうく年たけ物し給ふにつけて、つかさ位進みて、紫金に叙し、法司職にあげらる。入ては慎、出てはおこなひ、さるはみたびのぬれ髪を握り、哺をも吐て、上を敬ひ下を憐み給ひけん昔に習ひ、いさゝかの私ざまに腰のべ給ふいとまもなかりきとなん。さいつの比にや、中城王子尚純の君、御志学の御齢にて、大和の御守中将光久の君にま見え奉り給はんとてまうのぼり給ふ時、盛紀御うしろみの役にさゝれて供奉せらる。王子御としたけからず、はるけき浪路を経て渡り給へる御心ざしを、御守ねぎらひ給ひて、何くれと御ねもころに仰言あり。今の中将綱貴の君、その比は東の都につとめ給ひぬれば、御国にかへり入せ給ふを待とり奉り給ひ、御

たいめ給はりたまふに、此君も又あつくもてなさせ給ふるは、いかさまにも遠き[37]をやはらげ給ふ御心ばへなるべしと、供奉の上下喜びあふぎ奉り、みとせと聞えし春の半、錦[39]の袖を飜し給ふに、盛紀その折の勤め功ありとおぼい給ひ、かしこき詔ありて、うけ[40]織の紋ある冠を下し給はりしめいぼく、身に余りて、猶しも衣[41]を例にせし年月かさなり、六十年の坂をもこえて、やうく老の衰身にせまれば、名遂げ、身退く天の掟にまかせてんと、そくさく[42]を辞し申されけるに、君あはれみ給ひて、大和の君にとり申[43]給ふを、老のいさ[44]をしありと惜みきこえ給ふるにや、先同じつかさを加へたまひ、ことある時はめしまつはせて、かはらずつかふまつるべしと、掟給ふるよしを承り、かゝるおほけなき[45]詔に、おろかなる身の願もいかにぞやとて、霜[46]を帯たる頭に星をいたゞきても、かひなからずつかへ侍れど、老の浪頻に立かさなれば、いとゞつとめこらして、しばく訴を経奉られけるにもゆるされ給はで、矩[47]をこえざる齢に至りて、夏衣[48]あつさを侘る比より、病の羸身におほひ、ず[49]はう御薬何くれとすゝめて、その道のはかせどもをのくその術をつくせど、甲斐なくて、せこ[50]がころものうらめづらしき秋の初風にもお[51]こたらず、終に二[52]ほしの逢夜の夕のそらを待あへず、今朝今日七種の露にあらそひたるはかなさ、思ひいづるも哀ならずや、かしこしや。大君きこしめし、すなはち御使あり。又重ねて御祭のそなへものの御使あり。尚純の君よりも同じ筋なり。かくて喪所にみゆきならせ給ひて、今一たびむなしきからを見せ奉れとの詔、一かどの家の族は更にもいはず、うときもかゝる御いつくしみのかしこさを承りては、此人のすくせをうらやまざるはなかりき。誠にこそ、ことしのこと思ふ給ふるに、はや[54]一季をも過こし、はかなき夢幻にもかはらぬ世の習ひなりかし。けふの七種にとりまぜ、くいくさの名[55]号いとゞふしなけれど、露の手向計にとて、[56]

なに事もかりの名のみと思ひとりは[57]

迷ひをのこす道やなからむ
むつのね[58]のつみもきえなん二なく
三なき法のかどに入なん
ありと見るもかひなき物か夕露の
風まつほどのたまのひかりは
みつのよ[59]のへだてもあらじおのづから
十のさか[60]ひにあそび馴ては
たのめたゞち[61]かひの海の風ふかば
御法[62]のふねに身をもまかせで
ふるさとのくさ[63]のはらからけふはさぞ
露のあとゝふ袖しぼるらむ

右[64]のもよくつゞき申候歟。詞歌ともにあはれふかくきこえ申候。

注

1　亡父―盛命の父。伊野波親方盛紀。唐名毛泰永。万暦四十七（一六一九）年一月二日生まれ。康熙二十七（一六八八）年七月七日死。順治十一年に紫冠御物奉行。康熙四年十月三司官、死ぬまで在職した。

2　貞享五年―元禄元年でもある。

3　えぶのさかひ－閻浮の界。閻浮の身とも。人界の身。凡俗の身。えぶは「えんぶ」ともいう。閻浮は閻浮提の略。

4　庭の御訓－にはのおんおしへ。家庭の教育。庭訓を和らげたもの。

5　なをき詞－なほき詞。直言を和らげたことばか。

6　過行隙の駒－隙行く駒。隙の駒。月日が早く過ぎていくことのたとえことば。新古今、大納言隆季の歌に「あたらしき年や我が身をとめくらむひま行く駒にみちをまかせて」、千載集、二条院参川内侍の歌に「いかでわれひまゆくこまを引きとめてむかしにかへる道をたづねん」などがある。これは荘子、知北遊にある「白駒過隙」（白駒隙を過ぐ）から出たもので、時間または人生のすぎさることのきわめて早いことのたとえ。速い馬がものすきまをあっというまに過ぎる意。一説に、白駒は、日景（日の光）の意ともいう。

7　水こふ－水かふ。水飼う。馬に水を飲ませる。

8　みなみ－未詳。みのみ（身のみ）、みなみなの誤写であろうか。

9　しほれ－しをれ。しょんぼりして。うなだれて。

10　経仏のくやう－経仏の供養。死者や仏に供物を供えて回向すること。

11　みやうがふ－名号。念仏を唱えること。

12　糸心ほそく－糸ではないが、いと（とても）心細く。ほそくは糸の縁語。

13　かの椎の葉の露ばかり－万葉集、有馬皇子の「家にあれば笥にもる飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る」を下敷きにして、旅にあるのでわずかばかりの手向しかできないといったもの。

14　梵客－僧侶のこと。

15 さうじて－請じて。招待して。

16 けいめい－けいえいともいう。経営。全力をあげて営むこと。

17 しき忍ぶ－（旅の筵を敷き）しきりに思い出す。偲ぶ。

18 豊見城親方瑞養居士－盛良。唐名は毛泰運。万暦十四年生まれ、崇禎十五年死。天啓七年に三司官になり、薩摩からの帰国の途次遭難して在職のまま死んだという（『沖縄一千年史』）。

19 伊野波親方盛紀－注1参照。

20 首里佐司笠王子－父盛紀の妻、家譜には「尚久王女首里佐司笠按司加那志童名思乙金号慈室（万暦二十四年丙申閏八月二十日誕生、康熙二十五年丙寅十月十九日卒）」とある。「王子」は「王女」の誤写か。

21 いはけなかりし－無邪気だった。

22 君のおまし－国王の御座。

23 二葉よりかうばしき－大成する人は栴檀が二葉のころから香ばしいように、幼い頃から優れた面を発揮するというもの。「栴檀は二葉よりかうばし」（平家）。

24 山口しるく－（猟師が山の入口ではやくも獲物の有無を直観するということから）きざし、前兆の意。

25 紫金－紫巾の誤りか。通常親方は紫冠、紫巾、紫巾官といい、久米村の最高位を紫金大夫（親方）という。

26 入ては慎、出てはおこなひ－出所未詳。『孟子』滕文公篇に「入則孝、出則悌」とある。

27 みたびのぬれ髪を握り哺をも吐て－『史記』の「魯周公世家」に、周公が伯禽に言ったことば「一沐の洗髪の間にも三度髪を握って立ち、一飯の食事の間にも三度口の中の食べ物を吐き出して立ち、強いて天下の士に会おうとするのは、賢人を見失うことを恐れるからである」（小竹文夫・小竹武夫訳）とある。「吐哺握髪」「吐哺捉

髪」におなじ。

28 上を敬ひ下を憐み－出所未詳。

29 私ざまに腰のべ－私用で腰を伸ばして休んで。

30 志学－十五才のこと。孔子が十五才で「学を志」したという故事による。『論語』から出たことば。

31 光久－薩摩藩十九代藩主島津光久。

32 うしろみの役－後見の役。後見役。家譜では総大親となって、康熙十三年から二年尚純とともに上国している。

33 としたけからず－年齢が十分にいっていない。未熟。若い。

34 ねもころに－ねんごろに。懇切に。手厚く。

35 綱貴の君－薩摩藩二十代藩主島津綱貴。

36 御たいめ－ご対面。

37 遠きをやはらげ－遠くからやってきた旅人をいたわること。柔遠。

38 みとせと聞えし春－三年という春。家譜によると康熙十三年六月十九日那覇を出帆、十五年四月六日尚純ともども帰国している。

39 錦の袖を翻し－成功して故郷へ帰ること。衣錦還郷。

40 うけ織の紋ある冠－浮織の地紋のある紫の冠（はちまき）。紫地浮織冠。家譜によると帰国して七日目の四月十三日に頂戴している。

41 衣を例にせし－朝衣や官服を日常に（着た）。

42 そくさく－職爵。三司官や尚純の総大親という職と親方の位。

43 とり申－（目上の人に）取り次いで申し上げる。
44 老のいさをし－老人の功績。ここでは老練といった意か。
45 おほけなき－おそれ多い。
46 霜を帯びたる頭に星をいただき－（年をとって）霜をおびた白髪あたまになり、星をいただく（夜まで働く）。
47 かひなからず－弱々しくはかなく。
48 矩をこえざる齢－七十才。『論語』に「七十而従所欲不踰矩」（七十而て欲する所に従て矩を踰えず）による。
49 夏衣－なつごろも。夏着る着物。「あつさ」にかかる枕詞のようにつかっているが、その例はない。「夏衣」は「ひとへ」「うすし」「かとり」「たつ」「き」などにつく。
50 ずはう－ずほふ。修法。仏教で加持祈祷すること。
51 せこがころものうらめづらしき秋の初風－原注に「わがせこが衣の裙(ママ)を吹かへしうらめづらしき秋のはつ風」とある。古今集秋歌上、よみ人しらず。
52 おこたらず－快方に向かわず。
53 二ほしの逢夜の夕－牽牛と織女が逢う七夕の夜。
54 一季－一年。近世奉公期間を一季、半季といった。
55 くいくさ－悔い種。後悔の種、原因。七種の「くさ」にかける。
56 名号－「南無阿弥陀仏」。なみあみたふつの六字を頭にて歌を詠んでいる。
57 思ひとりは－「思ひとり」か「思ひとれば」であろう。つまり「は」の衍入か「り」の誤字があろう。国頭盛栄本には「思ひとれば」とある。これが分かりよい。

58 むつのね－六つの根。感覚や念慮を生じさせる六つの根源。眼、耳、鼻、舌、身、意。
59 みつのよ－原注「過去現在未来之三世也」とある。
60 十のさかひ－「十界」「十法界」。迷いから悟りにいたるまでの十段階。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、声聞、縁覚、菩薩、仏。
61 ちかひの海－誓いの海。仏が衆生を救おうとする誓願の広大さを海にたとえた語。弘誓の海ともいう。
62 御法のふね－仏が衆生を彼岸に渡す誓願を船にたとえたもの。
63 くさのはら－草の原。雑草の繁っている野原。転じて草の繁った墓。
64 以下は得無子の評語。

身まかりし娘の三回忌をとぶらふ詞

金も玉も何せんにまされるたから子にしかずとかやいひしは、山上の憶良の遠き歎なりかし。[1]人の親の子をおもふ心の闇は、むかしも今もかはらぬ世の例なるべし。わがいとをしうせし娘の齢、いまだはたちに二とせたらざりしが、[2]ねびとものひ、形優に、[3]みさを[4]しはうに、よの常けう[5]の心浅からず。年の程よりも心かしこう、[6]世なれてさふらふ後達、めのわらはにも、万に憐を加へ、[7]らうだうしければ、[8]侍る限りなびき隋ひて、此人のために[9]いとなき手をいだし、露心にたがふ事はなくも哉とつかへ物し侍りしに、[10]瓜をわるとかいひけん年の比、[11]尚氏朝亮公の三郎なりける朝次のかたに[12]ゆるして見え侍りしは、本より姑[13]の君はかれが伯母なりければ、いとゞ[14]うらなくつかへ奉りて、孝貞の節あり。婦の道の心おきてもけ[15]しうはあらじと思ふ給へしも、[16]はかなき誉児のくせなるべし。

扨、御国[17]の母と仰ぎ奉る御本にも、事ある折はめしまつはせ、裁縫の業をもおほせてつかひきこえ給ひしに、そのかたもたどたどしからずくして、うるさくみそなはし給ふるよし詔侍りしなど、思ひ出るも今はかひなき昔語なり[18][19]。さるは烏羽玉[20]のくろかみもすぢ永く、千代もとなでし印なくて、をとゝしの文月の比、二日計いさゝか例ならぬこゝちと見しまゝにて、とみによわり果、あへなく雫[21]の露ときえしは、中の三日なりかし。

あすは盂蘭[22]とて亡人のくなる日とこそ聞に引かへ、けふしもくらき途[23]に趣くはかなさ、いはんかたなし。かの住吉の神にかはらん（と）祈る命はをしからでと、侘奉りける親の心も思ひしられぬ。[24]

ちる花にかはりもやらで甲斐なくも
　のこる老木の本のかなしさ

まだかはきもやらぬ露のまに、二[25]の鼠足とく走て、三年のけふに廻き。けしき[26]計の香花をそなへ、同じ旅ねの宇留間僧をまねき、提婆[27]品をずして、泪ながらも故郷にはさぞ経仏のかざりいかめしう、一門[28]よりあはせてなくらん声を、糸にて玉にもぬくらんなど、思ひやるもいかなるすくせにや。

寂[29]なるひかりありてふ御仏の
　もとのすみかに君やますらむ
道しるべしてやをらぶるあだし世は
　おいもわかきもおなじならひと

妙なれやののりのはちす葉にごりにも
　しまぬこゝろをたねとひらきて
清き江におもひいらずばにごりなき
　こゝろの月のかげも見ましや
禅なるこゝろの水にうつしみて
　とをの界[30]もかげとしらなん
定なき世のためしとはしら玉の
　つゆときえにし人のかなしさ
尼がつの残るもうしやう[31]たゝね[32]を
　いさめし君は夢となる世に

注

1　金も玉も何せんにまされるたから子にしかず―原注「しろがねも金も玉も何せんにまされる宝子にしかめやも」とある。万葉集、山上憶良の歌。

2　人の親の子をおもふ心の闇―原注に「人の親の心はやみにあらねども子をおもふ道にまどひぬる哉」とある。後撰集、藤原兼輔の歌。

3　ねびとものひ―未詳。「ねびととのひ」か。これだと、おとなびて、の意。

4　優に―優美に。上品に。

5 しはうに－四方に。
6 けうの心－孝の心。孝心。孝行をする心。
7 世なれてさふらふ後達－年功をへた女房。上級の女官。御達。
8 らうだうし－未詳。「らううらうし」か。らううらうしは労労しで、たくみだ。ものなれている、の意。
9 いとなき－いとまなく。たえず。
10 瓜をわるとかやいひけん年－女子の十六才の称。破瓜。瓜の字を二分すると八が二つになるので。
11 尚氏朝亮－康熙十五年から同二十五年まで、尚貞王代の摂政だった大里王子朝亮。尚質王の次男（順治四年～康熙二十六年）。
12 ゆるして－許して。公認して。許嫁で。
13 姑の君はかれが伯母－大里王子の妻（当間翁主思武太金）は伊江按司朝敷の長女で、朝敷の次女が盛命の妻となっているので、娘にとって三郎の母（姑）は伯母にあたる。
14 うらなく－腹蔵なく。遠慮なく。
15 けしうはあらじ－悪くはない。
16 はかなき巷児のくせ－人から誉められるような子が長生きしないといういつもの例。
17 御国の母と仰ぎ奉る御本－御国の母は尚質王妃。現王尚貞の母。御本は御許で御座所のこと。
18 たどたどしからず－面倒くさがらないで。
19 うるさくみそなはし給ふ－いとわしくごらんになる。
20 烏羽玉のくろかみもすぢ永く千代もとなでし印なく－原注に「たらちねはかゝれとてしもぬば玉のわがくろ髪

をなでずや有けん」とある。後撰集、遍昭の歌。

21 籬の露－生け垣にふった露が朝には消えるように、はかないことの例え。

22 盂蘭－盂蘭盆。「盆」の脱字あらんか。盂蘭盆は梵語ウラムバンナの音訳。盂蘭盆会。七月十五日に先祖の霊や死者の霊を祭り、食物を供え読経して冥福を祈る行事。

23 くらき途－冥途をやわらげたもの。死者の霊魂の行くところ。死後の世界。

24 住吉の神にかはらん（と）祈る命はをしからで－原注に「泉式部娘の小式部病ける時命にかはらんと住吉に祈てよみし歌、かへらんと祈る命はおしからでさてもわかれん事ぞ悲しき」とある。この歌詞花集には「大江挙周朝臣おもくわずらひてかぎりにみえ侍りければよめる」と詞書があり、赤染衛門の歌になっている。

25 二の鼠足とく－『仏教譬喩経』に「黒白二鼠以喩昼夜」とあって、時間がたちまちすぎ去る例えに使っている。万葉集巻五憶良の日本挽歌の前文に、右の教典により「二鼠競走而度目之鳥旦飛」とある。盛命がいずれによったか不明。

26 けしき－ほんの少し。

27 提婆品－提婆達多品の略。提婆は仏弟子の一人。海中から身を現した竜女が五障の身を変じて成仏したというので、この教えを説く提婆品（法華経第五巻）は女性に人気があったという（新日本古典文学大系28　平安私家集）。

28 よりあはせてなくらん声を糸にて玉にもぬくらん－原注に「よりあはせてなくらん声を糸にして我泪をば玉にぬかなん　伊勢集」とある。

29 寂なる－以下七首の歌の初めに、寂・道・妙・清・禅・定・尼の七文字をかぶせてある。断りはないが娘の法

名であろう。

30 とをの界－十界。十法界。迷いから悟りに至る十段階。既出。

31 尼がつ－原注に「尼がつはばう子を云。幼子をねする時側にならべてねする也。いさむるは児のねかぬるをねよねよといさむる也」とある。「尼がつ」は天兒（あまがつ）で中に綿を入れて作ったお守りの人形。「尼がつ」の「尼」は法名の「禅定尼」を示すために借りたもので尼の意味はない。「いさむ」はすすめる、はげます意。

32 うたゝねをいさめし君－原注「たらちねの親のいさめしうたゝねは物おもふ時のわざにぞ有ける」とある。拾遺集、よみ人しらずの歌。

亡母をとぶらう詞

いにし天和の元つとし、葉月上の四日暁の露を日影にゆづりおきて、ひとりすゞ[2]しき道に立出給ひしそのよの御面影、今もつと立添て、露わすられ奉らぬは、下官本よりかたく[3]なに本性おれ[4]〳〵しく、むさいにおろかなるを、けそん[5]也と諫、教ひては剣[6]にふせし王陵が母の例をも、かろくし給ひつべく、機[7]をたちし孟軻の母の昔にもかはらじとなん、物し給ひしを、おくら[8]されては万にたづき[9]なく、大やけ[10]私ざまにつけても、こゝろぼそくのみ有経て、昨日けふと移りこし飛鳥[11]河の淵瀬、二十とせ[12]のけふに流れぬ。秋も半にちかしとや、朝夕[13]露のひるまのみ残るあつさの侘[14]しけれど、くるとば[15]虫の鳴音壁にちかく、あくとば[16]千種の花に風立、いとゞ懐旧の泪を催し、しほれがち[17]なる旅衣、なをはる〴〵と故郷のかたのみ恋しう、けふはさぞ我家のをの〳〵打つどひて、御仏に花奉り、遠き[18]世の忍の露を袖にもかけ侍らん、丸は此かりやにさう[19]〴〵しく独り御法の席を布忍びて、ゆかりの僧をさうじて[20]みやう[21][22]

香の糸心ぼそく、けしきばかりの供養を、なき玉も哀と社[23]てらし見給ふらん。導師[24]回向[25]の文よみ給ふ中、つくぐと御[26]かげの遠つむかしを思出奉るに、か[27]けまくもかしこき先王尚清[28]の君の御太子月浦[29]公の庶流向氏準法[30]司守謙居士の長女として、わかんどをりのかどありて、御みさをしはうに、かたちみやびやかに、御心ばへ[32]おほどき、尋常[33]御いつくしみふかく、一ぞうの限り家人[34]は更にもいはず、日比御かげにかくろへたる一本ならぬ草葉にも露の恵をかけ給ひ、らうたうし給ふ。物[35]からひすまし、みかは[36]やうどまで、ひとへになつき奉り、心をつくしてつかへ奉りしとなん。朝な夕な老たる後達、めのとやうのものども[37]ませ[38]しよに、御恵のふかゝりしふしぐ[39]を何くれとさえづり聞えて、幾たびも目は[40]うちひそみ、口はずげ[41]みて、今もおはしたらましかば、枯残る老木桜のまた花さく春もありなん物を、かつは御まごむまごのさか行末葉をも見給はゞ、いかばかりか嬉しくも覚え給はんなどひたいに手をあて、し[42]はぶきおぼれて、忍びごち[43]いひしことなど思ひ出て、いとゞ泪の雨まさり、かく惜まるゝ人も定まれる天の掟はのがれえぬ世の習ひとて、むなしき名のみ春のよの夢とのこるも、何のやくなし。終[44]とり給ひし前の日にや萱[45]堂に上りてまみえ奉りしに、御園生の花盛なるを詠給ひて、又後の山の木たかき梢など見渡し給ひしが、いと淋しげなる御気色なるを、けふはいかにぞや悩しげに見え給ふるはなど問奉りしに、うらゝかにいらへ給ひて、例の御物語など[46]ふしある物から、こゝろ[47]落給て、とかく語らひ奉りし中、とみに[48]御胸をいたみ給ふるよし、声はた[49]ゆげに聞え給ふ。家の内騒きさわぎ、急ぎ医のはかせを招き、御薬何くれとすゝめ奉れど、露のしるしもなく、いやましにのみあつしく[50]物し給へば、こはいかなるにかとて、たうとき[51]けんざをさうじ、符[52]つくりて、ずかせ奉り、修法その道をつくせども、甲斐なくて、たゞよはりによはり果給ひて、其[54]つとめて御齢[55]盧生が夢をかぞへて、菊の秋をも待あへ給はぬ御事ども、思へばくいやはかなぶる世の例也かし。啼（く）啼（く）[56]なき御から[57]を見上の森のあなたなる岩[58]ほの本に納め奉り、さ[59]りぬべき日のみは、とば[60]（かり）かの神[61]なりさわぐ、夜[62]の御とのゐとつかふまつら

ぬに、かく人[63]やりの道に出立、八[64]重の空水を隔たる身は、けふの御法をも、よ所ながら忍び奉る事本[65]の思ひならず。せめては手向草の品にとて、御[66]法号のもじを冠にて、

性にはへだてもあらじのりの庭
　ひらくる花はいろうすくとも
月の入かたぞ恋しきわかれてし
　きみがありかをそことおもへば
本にかへる道とはきけどうらめしや
　おくりすてたる野辺の草むら
光をもしばしのこさば入月の
　あとなるやみもまどはしものを
禅なるこゝろひとつにおもひ入
　ほかにはのりの道もあらじな
定なき世にながらへては[67]ゝきゞの
　かれてさびしきあとをとふかな
尼ならぬ優婆[68]夷ながらも思ひ入
　のりの門にはへだてあらじな

此[69]一巻、御悼のいづれもよく調申候歟。改削俳案御坐なく候。

おもひで草中巻終

注

1 亡母ー父伊野波盛紀の妻にして、盛命の母。家譜によると向氏大工廻親方朝株の女真尹金（崇禎五年四月十一日生まれ、康熙二十年八月四日死去）、号性月とある。盛命が供養した和歌の冠によると法名は「性月本光禅定尼」で性月は一種の略称であることがわかる。

2 すゞしき道ー極楽への道。

3 かたくなー頑固で。偏屈で。

4 おれ〳〵しくー愚かにみえるさま。

5 むさいー無才。無学。無能。

6 けそんー家損。家の恥。

7 剣にふせし王陵が母の例ー原注に「王陵母伏剣而死」とある。王陵母は漢の人。王陵の母。王陵は高祖の軍に従っていたが、項羽は王陵の母をとらえて軍中におき王陵を招くが、母は己の故に二心をいだくことを恐れて、自殺して王陵を励ましたという故事（前漢書、烈女伝）。

8 機をたちし孟軻の母の昔ー原注に「孟母以刀断其機」とある。「孟母断機」「断機之戒」などともいう。孟子が学業が完成しないうちに帰郷したとき、孟子の母が織りかけの布を断ち切り、学問を中断するのはこれと同じだ

と孟子を戒めた。

9 おくらされては－お送りなされては。葬送なされたからには。

10 たづき－方法。手段。

11 大やけ私ざま－公私。個人的でないことと私事に関すること。

12 こゝろぼそく－物さびしく。心さびしく。

13 飛鳥河の淵瀬－飛鳥川は奈良県高市・磯城両郡を流れる川で、古来、淵瀬の定まらないことで知られ、多くの歌に詠まれている。古今集、読人しらず歌に「世中はなにかつねなるあすかがはきのふのふちぞけふはせとなる」とある。ここでは、この句の上の「昨日けふと移りこし」と、下の「けふに流れぬ」の「流れぬ」の縁で引かれている。

14 朝夕露のひるま－朝夕の露が干るあいだの昼間。「ひるま」は干る間と昼間の掛詞。

15 侘し－つらい。

16 くるとば－未詳。「くるれば」の誤写か。

17 あくとば－未詳。「あくれば」の誤写か。

18 しほれがちなる－（涙で）濡れてぐっしょりとなる。

19 遠き世の忍の露を袖－過去を思い返して涙の露に袖をぬらして。後拾遺集よみびとしらず歌に「なき人をしのぶの露に袖ぬれてあれゆく軒の月をみるかな」とある。

20 さうぐしく－さびしく。

21 さうじて－請じて。招待して。

22 みやう香－名香。仏前にそなえる香のこと。
23 てらし見－照らし見。「照覧」をやわらげたもの。照覧は神仏が明らかにご覧になること。
24 導師－法事を首席になって執り行う僧。
25 回向－経を読み死者の冥福を祈ること。
26 御かげ－人の後影。人物像。
27 かけまくもかしこき－ことばに出して言うのも恐れ多い。
28 尚清－ただしくは尚真。
29 月浦公－尚真王の長子尚維衡・浦添王子朝満。浦添尚氏家の祖である。
30 準法司守謙－向氏大工廻親方朝株のこと。準法司は三司官待遇のこと。
31 わかんどをりのかど－王統の系統の家柄。「わかんどをり」は「わかんどほり」がよい。
32 おほどき－おっとりして。
33 尋常－つねに。いつも。
34 家人－家で仕えている人。
35 らうたう－郎等。従者。
36 物からひすまし－「物からひ」は「物あらひ」か。原注に「洗濯ナドスル下女厠掃除ナドスル賤女」とある。「厠掃除ナドスル賤女」は次の注37に付すべきか。
37 みかはやうど－御厠人。便所を掃除する女。
38 ませしよに－在せし世に。居られた頃に。

39 さえづり－さへづり。囀り。早口にしゃべり。
40 うちひそみ－泣きそうになり。
41 すげみて－（歯がぬけて）げっそりおちこんで。
42 しはぶきおぼれ－咳をして自失して。せきこんで。
43 忍びごち－ひそひそいうこと。ここでは息の下で、聞こえるか聞こえないかの声でいう表現。
44 終とり－死んで。
45 萱堂－けんどう。母親を意味する語。昔中国では家の北堂の庭には萱草を植えたという故事にならい、母親のいるその場所をいう。
46 ふしある物から－聞きどころがあるので。
47 こゝろ落－心が落ちつく。心がくつろぐ。
48 とみに－しきりに。
49 たゆげに－弱々しげに。
50 あつしく－（病が）重く。
51 けんざ－験者。加持祈祷をして験をあらわす密教の行者。
52 符つくりて－護符を作って。
53 ずかせ－未詳。「ずさせ」の誤写か。「ずさせ」は誦（ず）させ。（経など）読ませ。
54 其つとめて－次の日の早朝。
55 盧生が夢－人生の栄枯盛衰のはかないたとえ。盧生という青年が、邯鄲（中国河北省南部の地名）で、道士か

ら枕を借りて寝ている間に、栄華をきわめた一生の夢を見、さめると、かたわらの黄粱（あわ）がまだ煮えない短い間の出来事だった、というもの。邯鄲の枕。邯鄲の夢（枕）。黄粱一炊の夢。黄粱が一炊（既出）。

56 なき御から－なきがら、遺体の敬語。

57 見上の森－那覇市首里、玉陵の西、健児の塔の北にある一帯。家譜には、父盛紀を「見上森之墳」に葬ったとある。同所であろう。

58 岩ほの本－岩山のあたり。

59 さりぬべき日－そうあるにふさわしい（葬送の）日。

60 とば（かり）－未詳。「とばかり」か。「とばかり」は、それだけに、の意。底本一二字分空白がある。

61 神なりさわぐ－神鳴りさわぐ。雷鳴が響く。

62 夜の御とのゐ－夜の御殿居。宿直。ここでは「通夜」を和らげたもの。「と」は「も」か「さへ」などの誤写あらんか。この句「神なりさわぐ」と続いて「夜の御とのゐ」とあるので、平安時代雷鳴がはげしい時に宮中警護のために雷鳴りの陣がもうけられ、近衛の大・中・少将が伺候して終夜弓弦を鳴らしたことを下敷きにしているか。

63 人やりの道－王府の使者として立つこと。

64 八重の空水－未詳。末尾の得無子の文に「天水が渡の汐の八百合」とある。注14参照。空水はこの天水に同じか。空水と天水は空（天）と海水が接する大海原のことか。「八重」は海水がもみ合い、たくさん集まり会うところ。

65 本の思ひならず－本意ではない。

66 御法号のもじ―母親の法号の文字、「性月本光禅定尼」。家譜にはただ「性月」とのみある。

67 はゝきゞ―掃木。伝説の木の名。遠くからながめると、ほうきのような梢が見えるが、近寄ると見えなくなるという木。新古今集・恋に「園原やふせ屋におふるははきぎのありとはみえてあはぬ君かな」とある。

68 優婆夷―うばい。仏教語。在家のまま仏門に仕える女性の称。

69 此一巻……―以下得無子の評語。

思出草下（巻）目録

(ママ)阪防の祭をおがみしことば

慈眼寺に詣し詞

福山の駒率見にまかりし詞

弁財天をまつり奉りし詞

御いとまたうべて帰帆をもよほす詞

諏訪の祭をおがみし詞

それ神は人の敬ひによて威をまし、人は神の徳に運を添といへる古言、誠なる哉。此里の御鎮主[1]諏訪[2]の大明神は、右大将頼朝卿の御子忠久[3]の君、始越前・若狭・伊勢・信濃の四くにをしろしめされ、後建久七年の八月薩摩・大隅・

日向の三国を領して下り給ひ、代は五つぎに当り給ふ上総守貞久[4]の君、征夷大将軍尊氏[5]卿の御手に属して、菊地の何がしと戦をいどみ給ひし時とかや。御誓ひ有て、信濃の国より此御神を迎奉り、御城ちかくあがめ給へるとなん。始忠久の君、かの信濃国しろしめされしよに、信ふかく拝し給ひしことのもとゝあればなるべし。かつは此御神、弓矢とる家に分てあふぎ奉る例は、昔桓武天皇の御宇、天応廿年陸奥の夷高麿[7]といへるもの、達谷[8]の窟より起りて、駿河国まで貢上りけるに、征夷大将軍坂上田村麻呂[9]節刀を給はり、かれをたいらげ給ひける時、願たてゝ、信濃国諏訪の神に、この社を祝ひ奉らる。是都味歯八重事代主神[10]也。飛鳥の社と申。又同じ国川村の郡に、下の社を祝ひ奉らる。是建御名方命[11]となん。其後田村丸御願叶ひて、神楽岡といへる所にて、高丸[13]又悪路王などいへる、えせなる者[14]をせめ平げ給へるとぞ。かゝる例どもをきこしめし、伝へ給へるにや、貞久の君、御開陳の後、御願はたさんの御心入にて、御子川上の頼久の主を御[15]さうじみの代にて上せ給ひ、宇宿の忠秀を祭主におほせて、もり[16]下し祝ひ奉り給へると也。されば此郡の鎮主として、上に事ある時は、おもき神[17]わざを設て科戸[18]の風にまかせ、下にさがあるものはみしめ縄たのみをかけて、千里の外にはらふ。座主の坊には、法施[19]の鐘の声ながく、眠をさまし、神官のかたにはきね[20]が鈴の音、たえず耳をすゝ[21]しめたり。中にも年々の御祭、定まれるさはうども、いととうとき例しなりける。さるは頭屋[22]とて御社より二三丁こなたに清所[23]あり。尾花[24]かりふく穂屋のわたり覚えて、かりに茅ふける屋どもあまた有。こゝに高御座[25]をつけて、頭のちごとて齢十ばかりなる二人、左右とわかちて、左は守の御一族、右は他家よりえらばれて此二のやぐらに居給ふ。そのかみみさ山[26]祭の時、時の帝より勅使立られし御代とかや。又近き世までは居頭のやくとて居給ふ。こは将軍家より上使ありし代とぞ。いかなる故にや、此やくに定おかれし家をやめて、今は神官のかたよりつとめけるとなん。その下に、何くれ、何の司数おほかり。頭の児は水無月末つかたより、別火所といへるしめの中にうつろひ給ひ、水火のけがれをいみはらひて、文月朔日頭屋にはゐ給ふなりけり。

そのつとめて十日ばかり、近き御庄[27]のわかき民ども、躍と云事をつかふまつりて、おほきさのをのがたけにもあまるばかりなる太皷を前にかけて、もろ手にうち、背には二尋みひろにも過たらん竹の竿に絵かき、だみたる色々[29]の広きはたをつけてせおひ、四十あまり、あるは五十人ばかり、かいしろ[30]につらなり、中に十四五よりうちなるわらは、かね[31]・しやうご・どらやうの物、太皷にはうし[32]をあはせて、うたひおどりて、頭屋[33]にまいる。是を見る人大路もさりあへずなん。此あがた[34]躍、おはる[35]比は上下の市に住（む）わかうどゞも、又日をわけて小躍[36]といふ事をす。是はやゝこ[37]躍めきて、扇してはうし取、色々のかざり、作物などあり。こつゞみ[38]・さみせんやうの物、しらべあはせてをどるは、又かはれる見もの也。

うらぼに過て十八日にや猿楽[39]の能あり。守の御名代は島津又四郎どの、能の奉行[40]は何がしとかや。能は「玉のゐ」[41]「実盛」[42]「あこぎ」[43]「はじとみ」[44]「養老」[45]五つがひ也。かの汐干塩みつ[47]二の玉をてうしん[48]に取添て、天孫にさゝげて、ひるがへし給ひし舞の袖、玉のかんざし、かつらの黛、月も照そふ花の姿は、今も其世を見奉る心ちし、又風新柳[49]の髪をけづり、浪旧苔の鬢をあらひて、みれば墨は流れ落て、本の白髪となし、弓取の名をおしうする習ひ、誰もかくこそと願ひ見しに、聞[50]もうらめし古の娑々の名をえし阿漕が浦に、猶熱心の心ひく、網の手馴し鱗も、今はかへつて悪魚毒蛇となりて、紅蓮大紅蓮の氷に身をいため、骨をくだけばなどいへるあたり、さもおそろしき罪の報ひと、身もいらゝぐ[51]計なるに、唯かりふし[52]のよもすがら隣をきけば、御吉野や見嶽そうじの御声にて「南無当来導師」「みろく仏」と唱て、やをらふし拝む有様を見る時は、色にそむ心のうごくも仮の世の迷ひやと思ひかへすに、又いさぎよき[53]山の井の水たうくとして、浪ゆうくたがかたにうつろひ、治れる世の君[54]は舟、臣は水たり。水よく舟を浮べ、臣よく君をあふぐとて、万歳の道に帰りし孝の道、ふかき誉をのこすも、養老の滝のしら糸、永き世までの例なるべし。げに狂[55]言綺語のたはぶれも、讃仏乗の因、転法輪の縁ともいへば、是も世をみちびき、人に教

ふるはしなるべし。かゝる時のまの見きゝに随ひ、忠の道孝の心をおこし、あるは武士のいさめるに逢、かつは嫋[56]女の色あるに、まよふも皆是果しなき心の水の流なりかし。されば、心因（万）境転、転処実能幽也と昔の人もいひけんなど、胸にこたへて、あからめもせず見居たるに、頭の児の御父二人、頭、奉行のかたより、酒わりごやう[59]のものたうべければ、又是よりも御[60]ことぶきそへて、取あへぬ送物、時[62]につけたる情をかはす計也。

又下[63]の八日は、御祭の正日といへば、例の友どちをさそひ、神の御社のかたはらなる木立、物ふりたる峯陰の苺[64]を席に円居して、御祭を拝み奉るに、殿守御戸開きて、あたりもかゞやける玉の広まへに、神主従五位の大和守、冠束帯の上に裙をひかせて、けいめい[65]、舞踏の有様おごそかなるに、つきゝの神づかさ左り右、風折やうの衣帽[66]子、水色[67]布衣、色々をまじへて列座す。二人の頭の児は立衣帽子きて、べにして、鶴[68]の丸の紋書たるしろき素袍に、紅の袴白絹の御帯に合口[69]の刀はきて、御馬にめされ、唐笠さしかざして、広前にまうのぼり給ふほど、御先のそ[70]ないべは御[71]にへてこ、次に御祓持、御敷皮[72]もち、御草履持、御[73]うちは持とつゞきて、外に左右の御そなへ、鎚百本有。御社にはあまたの供[74]御見え、きやり[75]皷の声神さび、真弓[76]つき弓面白うふるひ出、二人の舞姫、ひるがへす袖の追風なつかしう、雲[77]の通路もいかにぞや。あやうき迄見えたり。

けふの御[78]代島津備中守、御前に二たび参り、金幣[79]いたゞき給ひて後、前なる桟敷に入給ふ。其御座三人は、御名代又やぐらの官と川上上野守、例の事とす。此時神馬二疋、口[80]つきの男率出て、尾[81]かみにしらにぎてつけて、あまたのおのこ、がやくと追はしらす。次にすまふ[82]取のおのこ二人、衣帽子をとりて、布衣をぬぎ、腕をならべて畏り居るに、御社よりかんづかさ[83]白き布をかづく[84]。是して腰をまはし、つと立出、かたみ[85]に手かまへして、二つがひ取てしぞく。御[86]にへ棚にいくらともなく備へ置れし草[87]づと、何をつゝめるにやあらん。衣帽子[88]白丁きたるもの共、是をもて峯の上より参りつどひたるわらはべ共になげかく。わらはべ共又かしこになげかへす。かくする事あまた

度にて事終、頭の児まかり申したまふとなり。此御神さいつ比にや、帝より正一位に叙し給ひ、近衛のおとゞ御筆を染られし御額有。万にかしこうおがまれ給ふる物から、いとゞ信ふかう、わが宇[89]留間の君の御栄えを祈奉り、かつはゆきゝの舟路しづかに、浪やはらげる末を誓ひ奉りて、

みさ山の神のしめ縄くりかへし
　さかゆくきみが千代をいのらん
いのるより神のめぐみをうるま島
　かよふ舟路やのどかならまし

右の詞始終よく調、神感もあらはれ、今も御祭おがむ心地仕候。[90]

注

1　鎮主―正しくは「鎮守」。その土地を鎮め守る神。守護神。以下にも「鎮主」の例があるが、これと同じ。

2　諏訪の大明神―はじめ出水市麓にあった諏訪神社。建御名方命・八坂刀売命を祀る。島津家初代忠久が山門院に下向して木牟礼城（現高尾野町）に入った折、同城の近くに信州諏訪社（上社・下社）の分霊を勧請したのが草創だといわれる。さらに島津氏久が康永二（一三四三）年頃東福寺城を居城とするにともない、鹿児島市清水町の当地南方神社に遷座している。その後文正二（一四六七）年薩州家島津国久が上社（建御名方命）を、のち下社（八坂刀売命）をも移して併せ祭った（『鹿児島の地名』平凡社）。盛命が見たのはここでの祭である。

3 忠久の君－薩州島津家の初代島津忠久（一一七九～一二二七）。源頼朝の長庶子とする。

4 貞久の君－島津家五代島津貞久（一二六七～一三六三）。

5 尊氏－足利尊氏。

6 天応廿年－延暦廿年の誤りか。天応は一年余りしかなく、また史実関係も合わない。

7 高麿－伝説上の逆賊。

8 達谷の窟－ここにも伝説上の逆賊悪路王や赤頭（あかがしら）たちが住んでいた。

9 坂上田村麻呂節刀を給はり－田村麻呂が征夷大将軍に任命され節刀を賜ったのは、延暦十六（七九七）年、高麿ら東北の逆賊を平定するのが延暦二十（八〇一）年である。

10 都味歯八重事代主神－古事記によると大国主命と神屋楯比売の間に生まれた神であるという。都味歯は未詳。このよみ「つみは」には刀の鍔の意がある。上の「節刀」と係わるか。

11 建御名方命－旧事本紀に「建御名方神、坐信濃国諏方郡諏方神社」とあって諏訪神社の祭神であることがわかる。だが大国主の系譜にも書紀にも見当たらない神である。

12 田村丸－田村麻呂に同じ。

13 高丸又悪路王－逆賊高麿と悪路王。

14 えせなる者－つまらない者。いやしい者。

15 御さうじみの代－御正身の代。忠久の御名代。

16 もり下し－守り下して。鹿児島に勧請して。

17 神わざ－神業。神事。神に関する行事。

18 科戸の風－風の神。また風。古事記に「志那都比古神」、日本紀に「級戸辺命」とある。和泉式部集に「憂きことはしなとのかぜぞ吹きもはらはむ」（下句）とある。

19 法施－ほっせ。仏教語。経を読み法文をとなえること。

20 きね－神に奉仕する人。巫女。奏楽、神楽舞にあずかる者をいう。

21 すゞしめたり－神慮を静めなぐさめる。

22 頭屋－神社の氏子の集団である宮座の座衆から選ばれて祭事の準備にあたる者。当屋、頭人ともいう。

23 清所－きよめところ。別火して沐浴潔斎するところ。

24 尾花かりふく穂屋のわたり－原注に「尾花ふくほやのわたりの一村にしばし里有（る）秋のみさ山　是諏訪の祭の事也」とある。玉葉集、金刺盛久の歌。祭事に参加する者が身を清めるために建てられた茅葺きの小屋を見て、この歌を連想したもの。

25 高御座－茅葺きの小屋の中に作られた櫓をこのように呼んでいる。普通は天皇の儀式の席をいう。「貧家記」では琉球国王のうささか（玉座）をかく記している。

26 みさ山祭－御佐山祭。七月二十八日の諏訪神社の大祭。茅葺きの穂屋（頭屋）を構え、児童二人を頭殿に指定して一ヵ月間籠もる。参籠の間、近在の村々から連日鉦鼓踊りを奉納し、市踊り、散楽も演じられた。信州諏訪社の御射山神事にならったものという（「鹿児島の地名」）。

27 近き御庄－近郊の村。近くの村。

28 おほきさのをのがたけ－大きさ己が丈（にもあまる鼓）。

29 だみたる－着色した。彩色した。

30 かいしろ－垣代。垣根の代わり。かきしろの音便。
31 かね、しやうご、どら－鉦、鉦鼓、銅鑼。
32 はうし－拍子。はくしの音便。
33 頭屋－前出。
34 さりあへず－（混雑して）避けられない。避けることができない。
35 あがた躍－県踊り。いなか踊り。
36 小躍－城下の上町下町の若者による踊りである。小踊りは小歌踊りの意か。
37 やゝこ躍－幼女が演じる舞台芸能の総称。女歌舞伎で子供らしい扮装の小歌踊り。または少女たちによる群舞形式の盆踊り。そのいづれか分からないが、女装して踊っているということであろう。
38 こつゞみ、さみせん－小鼓・三味線。
39 うらぼに－原注「盂蘭盆」。中巻の「身まかりし娘の三回忌をとぶらふ詞」にもでる。
40 猿楽の能－能のこと。猿楽はもともと滑稽な演技を意味したが、観阿弥や世阿弥らが出てこれを大成、今日の能の基礎をきづいた。
41 「玉のゐ」－「玉井」。信光作。脇能。日本書紀・古事記の隼人舞起源説話譚に取材したもの。
42 「実盛」－元清作。二番能。平家物語巻七「実盛」による。
43 「あこぎ」－「阿漕」。元清作。四番能。古今六帖・源平盛衰記巻八による。
44 「はじとみ」－「半蔀」。内藤左衛門作。三番能。源氏物語「夕顔」による。
45 「養老」－元清作。脇能。続日本紀巻七・十訓抄第六・古今著聞集巻六による。

46 五つがひ－五番。「つがひ」に原注「番」をあてる。つがひというのは幾つかのものをひとつにつなげることをいうが、ここでは能の一曲を一番というのにならい、つがひと読んでいる。

47 汐干塩みつ二つの玉を～かつらの黛月も照そふ花の姿は－「玉井」からの引用。

48 てうしん－釣針。つりばり。

49 風新柳の髪をけづり～誰もかくこそ－「実盛」からの引用で、これには「気霽れては、風新柳の髪を　梳り、氷消えては波旧苔の鬢を洗ひて見れば、墨は流れ落ちて、元の白髪となりにけり。げに名を惜しむ弓取り　は云々」とある。ここは和漢朗詠集早春、都良香の詩に「気霽風梳新柳髪、氷消浪洗旧苔鬚」による。

50 聞もうらめし古の娑々の名をえし阿漕が浦に～骨をくだけば－「阿漕」からの引用。「娑々」は「娑婆」の誤写。「阿漕」には「娑婆にての名にしおふ」とある。「熱心」も「執心」の誤写。「紅蓮大紅蓮の氷」は紅蓮地獄のこと。八寒地獄の一。罪人がここに落ちると、寒さのため体が凍え、裂けて紅蓮の蓮華の花びらのようになるという。

51 いらゝぐ－鳥肌立ち。慄然として。

52 唯かりふしのよもすがら～南無当来導師みろく仏と唱て－「半蔀」からの引用。南無当来導師は未来の世に到来すべき弥勒菩薩。源氏に「なも当来の導師」（夕顔）とある。

53 いさぎよき山の井の水～臣よく君をあふぐとて万歳の道に帰りし－「養老」より引用。

54 君は舟、臣は水たり。水よく舟を浮べ、臣よく君をあふぐ－荀子、王制篇に「君は舟なり。庶人は水なり。水則ち舟を載せ、水則舟を覆す」とある。平家物語第三、城南之離宮にも「君は舟、臣は水、水よく船をうかべ、水又船をくつがへす。臣よく君をたもち、臣又君を覆す」とある。謡曲「代主」にも「それ君は舟臣は水。水よ

く舟を浮べつつ、臣よく君を仰ぐとかや」とある。孔子家語、貞観政要にも見える。

55 狂言綺語のたはぶれも、讃仏乗の因、転法輪の縁－狂言綺語（きゅうげんきぎょ）は、ここでは十悪の一、妄語綺語におなじ。かざりたてたことば。詩歌文章、歌舞音曲のたぐいをもいう。讃仏乗は仏の教えを讃えること、転法輪は法輪を回転してただしきに向かわせる意。説法のこと。和漢朗詠集に「願はくは今生世俗の文字の業狂言綺語の誤りをもつて、翻して当来世々讃仏乗の因、転法輪の縁とせむ」（白氏文集）とある。謡曲「東岸居士」にも「狂言綺語を以て讃仏転輪の真の道」とあり、同じく「采女」「簸祇王」にも「讃仏乗の因縁」などとある。風姿花伝にもみえる。

56 嫋女－たわやめ。たをやめ。上の「武士」（ますらを、もののふ）の対。たおやかで、しなやかな女。

57 心因（万）境転、転処実能幽－心は万境に因って転ずるも、転ずる処実に能く幽なり。伝灯録二篇二十二、祖摩拏羅章に出る。心はあらゆる環境に随従して転変しながらも、その転変のしかたは何とも秘めやかである（古賀英彦編著『禅語辞典』一九九一年）。ただし「心因」は「心随」となっている。

58 あからめもせず－わきめもふらず。目をそらさず。

59 わりご－破籠。白木の折り箱のようなもので、中に仕切りがあり、かぶせ蓋にした弁当箱。これに食べ物を入れたものもいう。

60 御ことぶき－お祝いのことば。

61 取あへぬ送物－急いで用意した当座の送物。

62 時につけたる－時宜にかなった。

63 下の八日は御祭の正日－諏訪神社は七月二十八日が大祭、みささ祭の日である。

64 苺－こけ。苔に同じ。苔の莚は山住の人が敷く粗末な敷物。

65 けいめい－敬命。慎み敬うこと。

66 衣帽子－烏帽子。成人した男子の被りもの。「衣帽子」は誤りか。以下同じ。

67 水色布衣－無紋の狩衣の称。無官の者の着るもの。

68 鶴の丸の紋－丸のなかに前を向いた鶴が羽を上に広げた図。島津家の紋。もともと島津の家紋は、鶴の丸の下に十の字の家紋だったが、十の字だけを家紋とするようになったものである。

69 素袍－素襖（すあを、スオウ）に同じ。直垂が変化したもので、近世には武士の礼装になる。その場合上に侍烏帽子、下に長袴をはくが、この祭では紅（もみ）の袴を着ている。

70 合口－鍔がない短刀。素襖を着るときに佩用する。

71 そないべ－備え部。行列する一隊。

72 御にへてこ－御贄を手に持つ少女。「にへ」は神前にそなえる供物。

73 御うちは持－御団扇持ち。団扇を持つ者。

74 供御－ぐご。神前に供える飲食物の敬称。

75 きやり－木遣り。木材を運ぶこと。城や寺社などの大規模な工事の時には木遣り歌を歌ったりしてはやす。「きやり」の「や」は底本「弥」を字母とする仮名で、「に」と読むべきものだが、琉球で「や」と読むこともあることから宛てられたか。

76 真弓つき弓－檀弓と槻弓。伊勢物語に「梓（あずさ）弓・檀弓・槻弓」とある。

77 雲の通路－雲の上の天人や鳥の通る道。古今集、良岑宗貞（遍昭）の歌に「五節の舞姫を見てよめる」と詞書

して、「天つ風雲の通ひ路吹きとぢよをとめのすがたしばしとゞめん」とある。

78 御代－御名代で「名」脱か。

79 金弊－きんぺい。神への捧げ物（幣、ぬさ）としての（大判小判といった）金貨。

80 口つきの男－馬牛の口を取って引く者。

81 尾かみにしらにぎて－馬の尾とたて髪に、カジなどの皮の繊維で織った白い布の幣帛（を結び付けて）。

82 すまふ取－相撲取り。

83 かんづかさ－神司。神主。神事に仕える人。

84 かづく－いただいた衣裳や布など肩にかけること。

85 かたみに－互いに。

86 御にへ棚－（あとで投げ合いになる）贄が並べられた棚。

87 草づと－草で包んだ苞。注86の贄のこと。

88 衣帽子白丁きたるもの共～あまた度にて事終－祭礼には魚を蒸苞に包んだものを社殿から参詣者に投げる贄打ちという行事がある（「鹿児島県の地名」）。

89 宇留間の君－琉球国王。

90 以下得無子の評語。

慈眼寺に詣し詞

葉月中の八日、わが中山の友がきに誘れ、谷山の郡慈眼[1]寺の観世音に詣けるに、野本氏の真人も年比御願ありとて、同じ心に思立給ふは、あひに逢たるよすがなりといざなひ、[2]行屋の浜辺より小舟に乗、[3]真帆に追て、よもの浦山やゝ秋ふかく、色付行けしきを詠て、[4]浪の花にぞ秋なかりけるなど、打うめく程、谷山の浦に着、それより里におりて、山田の畔をはるゞくとつたひ行て、[5]松竹茂りたる細道の奥に、杉の生垣つゞきたるを分入見れば、木立猶物ふり、石の鳥井[6]苺みどりに、[7]阿吽の二尊[8]けうとく立り。寺は嶮たかくそびえ、山水清くめぐりて、いとかごかなる岩垣の中に、つくりならべたり。山の名を補陀[10]山とぞいふなる。開基いつの代にや、きかまほし。[11]九代の太守陸奥守久豊の君、御法の誹存忠義天庵主[12]御婦夫二所の御牌ならび立給ふとなん。

その御前を過て、大きさたかさの二丈三丈にもあまりたらん巌、わざとつくりなせるかとみゆるが上に、[13]大悲の御堂あり。御仏は日羅上人の製作とかや。砌にちかく、みなぎり落る滝の糸は、結ぶ願にかけ奉る御手の糸かとあやしまる。岩橘苔なめらかなるを渡りて御前に参、恭[14]敬賛歎してまつ。[15]居蕉諸方所の弘誓をあふぎ奉り、しばし御はしのらん千に詠て時をうつすほど、[16]不断の香の烟は林にかほり、[17]常住の灯の光は水に映ぜり。げに南の海の[18]補陀楽のきしも、かくばかり社と見るに、たうとさ肝にこたへて、わが宇留間の君の御国もかたよく思ひやられ、[19]御末葉のさかえを祈奉りて、

君がしる国もみなみの御仏に
さか行末をかけていのらむ

又遠き浪路を隔たる身には、思ふ心なきよしもあらねば、万に行末を祈ごちて、かつは波浪の風、能没[21]の御誓ひをたのめ奉りて、

いのるぞよ八重のしほ路の浪かぜも
なぎてしづけき舟のかよひを

滝の辺にて、

世をすくふちかひの網にむすぶらし
たえぬ流のたきのしら糸

滝の水上、松・杉・楓など茂りたる。あなたの岩ねをつたひ、たどり行て、山復[22]山、水復水、何の工みがけづりなし、誰成家に染なすなと、目[23]もあやなるに、木くらき谷かげより、よきながれあまたにわかれて、色々の珠をまきたるかと、見るばかりなり。さゞれ石、底あらはにさながらあさく流れ、清少納言[24]の心にもかなふべき所あり。又広き岩がねをたいらかにて、むしろに布たらんと覚て、松杉もそのちかうは、種とゞむまじき所あり。その岩間をながるゝいさら[25]小川に、盃をうかべて、曲水の興を思ひよせ、礎石遅来を待侘、率流遡過をさえぎるなど朗詠してか[27]たそに酌かはし、かれ飯たうべて胡麻飯によそへ、はてくは今やううたひのゝしり、日も暮にちかづくまゝ、かゝる所にてこそ斧[29]の柄もくたし、半日の客となるも、七世の係には逢つらんなど、やうく心づきて、帰さを催

し本の浜辺に出て舟出す。暮かゝる程、秋風やゝさむく吹出ぬれば、かの山より拾ひこし柴[30]・紅葉を焼て又酒をあたゝめ、興をそへて例のをゆびをかゞめて、沖中なれば、人のきくらんも、用意もなく、声[32]をほにあげて、ひとつふたつ三つなど、いどみかはすも、折つきなかず。是にぞむれゐてあそぶ鴎も驚くばかりなりき。夜に入て、夕闇のいざり火ほのめきいで、をのかじゝ世を渡るいとなみ、哀におぼえて、[34]

照し見よ世をうみわたるいざり火の
　きえてむくはん後のやみぢを

かくうめく程、おぼえず家路ちかく成ぬるに、むかふよりともし火たかくかゝげてこぎくる舟あり。こはなぞと見るに、わが旅やかたに残りし人々坂むかへすとて、酒わりごやうの物[35]でうじてもてこし也けり。いとかしこく待とりて、蒲[37]のほなはならでも、むやゐしてなど、戯れ又くみかはし、居待[38]の月、たかくのぼるまで、浪のまにくく逍遙[39]して、

更すぐるほどぞしらるゝさくら島
　嶺さしのぼる月をながめて[40]

名残はつきぬ物から、今はとてをのくく旅のやどりにあかれぬ。丸はひとりおましについゐて、ねられぬまゝに、けふみし山、みつ[41]の勝地、その面影わすれぬほどに、かひつけて後の思出草にのこすばかりに。

注

1 慈眼寺－じげんじ。鹿児島市下福元村慈眼寺町にあった禅寺。寺伝によると百済から渡来した日羅の開基とされ、聖観音が安置されていたという。十八代島津家久の号をとって慈眼寺とした。島津家の尊崇あつく、坊津一乗院、志布志宝満寺とともに薩摩三寺と呼ばれる名刹。

2 あひに逢たる－揃いも揃った。

3 行屋の浜辺－鹿児島市鶴丸城下東小川町にあった琉球仮屋（琉球館）のさらに東の浜が行屋（ぎょうや）である。「下り口説」に「いざや御仮屋立ち出て、滞在の人々引き連れて、行屋の浜にて立ち別る」とある。

4 真帆に追て－真帆に風を受けて（目的地に）むかって。

5 浪の花にぞ秋なかりける－原注に「草も木も色かはれどもわたつみの浪の花にぞ秋なかりける」とある。古今集、秋、文屋康秀の歌。

6 苺－苔に同じ。

7 阿吽の二尊－阿形吽形の仁王像。

8 けうとく－恐ろしく。

9 かこかなる－四方とりかこまれて静かなさま。ひっそりとしているさま。

10 補陀山－補陀洛（山）、補陀落（山）、補陀楽（山）に同じ。インドの南海岸にある観音の住むという山。「神道記」にも「補陀山」とある。

11 九代の太守陸奥守久豊－島津家八代島津久豊（一三七五～一四二五）。

12 御婦夫－おんめおと。御夫婦。

13 大悲の御堂－観音堂。観音菩薩は「大悲者」ともいう。
14 恭敬讃歎－くぎょうさんだん。つつしみうやまい、仏の徳を讃える。
15 居蕉諸方所の弘誓－未詳。
16 不断の香－絶えず焚かれる香。
17 常住の灯－いつもかかげられるともしび。注16と対。
18 補陀楽－補陀落、補陀洛に同じ。注10参照。
19 かたよく－肩よく。運がよく。
20 御末葉－王の子孫。
21 能没－未詳。能はダイとよみ耐に同じ。よく没するに耐える意がある。既出。
22 山復山、水復水－やままたやま、みづまたみづ。和漢朗詠集に「山復山　何工削成青巌之形、水復水誰家染出碧澗之色」とある。
23 目もあやなる－目がくらむようなさま。
24 消少納言の心にもかなふべき所－どこをさしているか詳らかにしえないが、枕草子二三二段「月のいとあかきに、川を渡れば、牛のあゆむままに、水晶などのわれたるやうに、水の散りたるこそをかしけれ」とある。
25 いさら小川－細く水のすくない小川。
26 礙石遅来を待伐、率流湍過をさえぎる－和漢朗詠集巻上春、三月三日に、菅原雅規の「礙石遅来心竊待、率流湍過手先遮」（石に礙って遅く来れば心窃に待つ、流に率れて湍く過れば手に先づ遮ぎる）
27 かたそに－「かたみに」か。かたみには、交互に、代わるがわるの意。

28 今やう－今様。当世風の歌。俗謡。

29 斧の柄－ほんのしばしと思っている間に、久しい年月をすごすこと。中国、晋の王質が山へ木をきりに行き、仙人の囲碁の一局を見終わらぬうちに斧の柄が腐っているのに驚き、村に帰ると、知人はみな既に死んでいたという故事による。「七世の孫」については『太平御覧』に出る。

30 柴紅葉を焼てまた酒をあたゝめ－和漢朗詠集巻上、秋興に「林間に酒を煖めて紅葉を焼く」（白氏文集）とある。

31 をゆびをかゞめて－未詳。指を屈めて。口笛を吹くことか。

32 声をほに－声を帆に（あぐ）。声をはりあげる。

33 折つきなかず－「折つきなからず」で「ら」脱か。「折つきなからず」は（場所・時が）似つかわしくない、ふさわしくない意。

34 をのがじゝ－各自。銘々。

35 坂むかへ－旅から帰ったものを出迎えてする酒宴。聞得大君の御新下りの時、聞得大君と首里大君（大あむしられ）一行を、真壁大君と儀保大君が赤田待口に出迎え、お酒をお酌し上げることあり。坂迎えである。

36 てうじて－調じて。調理して。料理して。

37 蒲のほなはならでも、むやゐして－原注に「むやゐする蒲のほ縄のたえば社蟹の友舟行もわかれめ」とある。

38 居待の月－陰暦十八日の夜の月。

39 逍遙－きまかせにあちこち歩くことだが、ここでは舟をきままに遊覧すること。

40 更すぐる－ふけすぐる。夜がふけ深夜になる。

41 みつの勝地－瑞（みつ）の勝地。美しい景勝地。

福山の駒率見にまかりし詞

大隅[1]の国福山[2]の御牧は、三[3]国の中にあまたある御牧の第一なること、聞えし駒率例の事にて、葉月の末に有といふを見にまかりてんとて、同じ旅寝の友どちいざなひ、平野氏の左衛門なりける真人[4]をあなひにて、下の四日小船二艘にわけて漕出けるに、風おはねば、からろ[5]をはやめて、桜島をめてに、田の浦[6]小磯大いそなど弓手[7]に詠て、三舟[8]の明神、滝[9]が水の御霊[10]など余所ながらおがみて、おほくの浦山秋ふかき梢の松[11]をのこして、色付行気色など、名に負須磨[12]明石の秋もかばかりはなど、いひしろひ、めぢ遠くしら雲[13]のたえまにたかきは、日本武[14]の尊の清き御心をあらはして、跡[15]たれ給ふ白鳥の嶽、そがいより見ゆるは、名[16]に高智穂の串根嶺などいふを、あふぐに、霧にもまぎれぬたかねの烟、そらになびくけしき、是、青草[17]の罪にかはりてもえ出るとの神詠[18]肝にこたへ、いにし春の比、拝奉りし霊地のわすられぬ事ども語らひ行ま（ま）に、日も停午[19]にのぼれば、わりごとりまかなひ、盃数をかさねて、うたひのゝしり、舟子共のつかれやすめてなど、しねそし、やうく暮かゝる程、福山のさとにつく。かりねは大安寺[20]の門の中、太郎おとゞの宿なり。いとかごかなる所にて、かしこまりもおかず。終日の舟つかれを休めけるに、此城の地頭代[21]とて、諏訪氏のゑもんなりける真人、きのふ爰に物し給ふとて御使あり。此宿いふそくむつかしげなるあたりと聞給へば、御かり屋にまうでなんやなど、さもねもころに、かごにさかなやうの物入てせうそこし給ふ。思ひもかけぬかしこさをのべて、翁氏[22]、平野氏など、共に手をたづさへて問より侍るに、御あるじあつく物し給ひて、御さかな、何くれと数あり。酒はずん[23]をかさねて、所につけたる興を催し、うたひかなでゝ、夜ふくるまゝに、本の宿に帰り、草枕引むすぶ程もなきに、明ぬといへば、急ぎ出て、さしもけはしき坂をあがるに、かたへにゆへ有げなる塚あり。こは前の太守貴久[24]の君の御弟右馬頭忠将[25]ときこえ給ふ御事の、廻[26]の何がしがために、

此所にて討れ給ふ御はか也。さてこそ、こゝをてんきう坂[34]といひ、御法の誹[35]大安心翁にて、やどりせし寺もその御寺なりといへば、武士の身[36]のなる果哀なる世の例を忍び、遠き昔の御跡をとぶらひ、御名をとなへてゆく程、やがて御牧ときこえぬ。見[37]やりなる山たかく、野辺広き中なる岡のほとりに、御名代・奉行・頭人の桟敷あり。その外つかさ〳〵の幕の数こゝらみちく〳〵て、串目[38]〳〵のはたじるし秋風にひるがへり、そのいきほひ[39]まうに時をまつとみゆ。酒くだものやうの物売あき人は、市[40]の辻にもこえたり。下官らよきあたりの芝生におりゐて見るか、[41]中山のおく野のこなたかなたより、いくむれ共なく追出す駒共、広き野面の西ひがし、北南とはせちがひて、[42]おろの中にこもるは、いく千々[43]とみる数をしらず。わかきおのこども[44]おどりまはりて、二歳の駒ばかりを分てとらふる有様、目を驚す計也。けふの若駒百七十四疋となん。上れる代に、大やけの駒率とて名高くいひ伝るも、信濃駒率八月十五日にて定れる数六十疋、甲斐の穂坂の駒廿疋、同十七日にひかる武蔵の小野の御牧より四十疋、是同廿日と也。その外秩父の御馬廿疋、立野の御馬十五疋、同廿三日に又信濃の望日(ロ)の駒廿疋、同廿八日上野の御馬五十疋づゝ、毎年ひかれしとなんかたるに、此御牧の駒はとしぐ二百にちかくめされ、この外御国の中二十に及ぶ御牧をもたまへるは、君ゆたかに国とめる御印也ける。事終れば大勢に先だち野辺をいでゝ、里に下り、しばしやすらふ程、日もくれ追風さへ吹出ぬときけば、此宿を立出るとて、福山を物の名にして名残おほかる心を、

[45]おひてふく山のあらしに舟出して
　名残をそふる浦の夕浪

[46]右の記行又よく調申候歟。

注

1 大隅の国－島津氏の領国の東側・帯をいう。北部は日向国に接する。
2 福山の御牧－鹿児島県姶良郡福山町福山にあった藩の牧場。
3 三国－薩摩・大隅・日向の三国。
4 あなひ－案内役。
5 風おはねば－風を背に追わないので。まともの風がないので。
6 からろ－空艫。艫を水に浅く入れて漕ぐこと。
7 めて－馬手。右手。
8 田の浦小磯大いそ－曽於郡志布志町田之浦の海岸。大磯小磯は修辞か。
9 弓手－弓を持つ手の意で、左手のこと。
10 三舟の明神－未詳。出水郡東町浦底の三船湊から勧請したということか。
11 滝が水－りゅうがみず。鹿児島市吉野町平松。吉野台地から鹿児島湾にそそぐ急流の小川。
12 須磨明石－源氏物語第十二帖十三帖の名。源氏が京を離れわび住まいしたところ。風光明媚なところで、古来歌枕として名高い。須磨は兵庫県の神戸市（摂津国）須磨。明石は同明石市（播磨国）。
13 いひしろひ－言い合い。語り合い。
14 めぢ遠く－目路遠く。目に入る景色が遠く。
15 日本武の尊－やまとたけるのみこと。日本武尊。記紀が伝える英雄。熊襲や蝦夷を征討し、東征の帰途伊勢の能褒野で死んだ。原注に「もとよりのきよきこゝろをあらはしてたゞ白鷺となりて社ゆけ　是神詠也」とある。

16 跡たれ給ふ白鳥嶽－「跡たれ給ふ」は衆生を救うために神となって現れること。垂迹。曽於郡有明町伊崎田には日本武尊が熊襲征伐のおり立ち寄ったという伝説にもとづき、同尊を祭主とする白鳥神社がある。

17 そがい－うしろのほう。後方。背面。

18 名に高智穂の串根嶺－「名に高智穂」は名高い高千穂岳の意。「串根嶺」は未詳。

19 青草の罪－原注「青草のつみにかはりてもえいづる烟ぞ神の姿也ける」とある。

20 神詠－神歌。神の徳を讃える歌。

21 停午－ていご。正午。まひる。

22 大安寺－曹洞宗の寺。開山は勝厳祖幢。永禄四年（一五六一）七月十二日廻城の肝付氏攻めの際討死した島津忠将（島津忠良次男）のために、忠将の法名大安心翁に因んで大安寺としたもの。福山郷の菩提所。

23 太郎おとゞ－長男の貴人（大臣・公卿）の意。ここでは薩摩藩当主島津綱貴の長子吉貴のことか。

24 かごかなる－あたりいちめんがひっそりしているさま。閑静なさま。

25 かしこまりもおかず－遠慮もしないで。恐れ多くもなく。

26 いふそく－いうそく。有職。作法・儀礼・服装などのきまりごと。

27 せうそく－消息。連絡すること。声をかけること。

28 翁氏－盛命の後任の年頭使翁氏佐久真親方忠祐。

29 ずん－順。盃を順々に巡らせて酒を飲むこと。

30 所につけたる興－その場にふさわしい座興。ちょっとした遊び。

31 太守貴久－十五代藩主、忠良の長子。

32 御弟右馬頭忠将－忠将は忠良の二子で、貴久の弟。

33 廻の何がし－忠将は廻城の肝付氏攻めのさい討死、忠将とともに討死した家臣五十七人の位牌が安置された。忠将の墓も現存する。

34 てんきう坂－てんきうは典厩（てんきゅう）で、忠将の右馬頭の唐名。これに因んで坂の名にしたものであろう。

35 諱大安心翁－島津忠将の諱。

36 身のなる果哀なる－原注に「埋木の花咲事もなかりしに身のなる果ぞ哀也ける　源頼政詠」とある。平家物語四「宮御最後」に出る。

37 見やりなる－見はるかしたむこうの方。

38 串目－串目立ともいう。近隣の郷から集められた民夫。注44参照。

39 まうに－猛に。勢い盛んに。

40 市の辻にもこえたり－臨時にできた市場の通りも大勢の人が出てすすむことができない。

41 中山のおく野－山のなかの奥の野原。

42 おろ－檻。牧場の一部を囲って、そこに野馬を集めて取るように構えた場所を、南九州では一般にオロといい、苙という文字を宛てる（柳田国男『分類農村語彙』）。

43 千々－ちぢ。かずが多いことの例え。

44 おどりまはりて－（馬を追って）躍り上がり、かけ回って。福山野馬牧の設置は天正八年（一五八〇）、毎年八月に馬追いという二歳馬を取る行事があった。馬追いは藩の役人の指揮で日向松山郷をはじめとする二十郷か

ら串目立という民夫一万二千人が動員され、各郷の旗幟を立てた串目立が山野を走り馬を追った。思出草に近い宝永六年（一七〇九）には馬数二千二六三疋だったという（「鹿児島の地名」）。

45 おいてふく山の－追い手（風が）吹く福山と掛ける。

46 以下、得無子の評語。

弁財天女を祭奉りしことば

長月の七日は弁財[1]天女の御縁日[2]なれば、この御館のかたはらにあがめ置奉る御社の前に、神司をまねきて御祭とりおこなふに、旅[3]のむしろせばければ、かの四肘[4]の壇も設えず、乳蘇酪味[5]の百種共[6]ことそぎて、唯以余味[7]応供の金文に随ひ、例の椎[8]の葉にてはぶき奉りき。爰に物せしうるま人、国の人も、年比わが君の恵にかゝりしは、皆参つどひてみてぐら[9]奉り、をの〳〵離苦与楽[10]の御本誓を仰ぎ奉る。中にも、よのつね、此館に随ひつかはれしやから、みそよそ計広前につどひて、をのがじゝ[11]世わたるたづき[12]を祈るなるべし。此きはには、蔵司[13]の人あるじ（し）て、水[14]むまやにみきをすゝめければ、果々は、酔に入て、思ひおもひの狂言綺語、是も又神をいさましめ奉る便なりけり[15]。あるは、心ざしありて詣ける外様[16]の人々、出入袖口色ありて、行かふ門[17]の前道もさりあへずなん。あるは、月[18]比の御とくいとて、けふの祭をよすがに、問より給ふまらうどあまた汲かはし、夜更る迄うたひ興じて、下官えひなきの余り、かたへ[19]に向ひて語りきこゆるは、此天女仏ませし世に宇賀神王[20]と現じ給ひ、信敬のものには福田をほどこし、一切の魔土をしりぞけ、二世の願をみたし、怨敵をたいらげ、愛敬をえさしめ給はんとの御誓ひをなし給ふ。久遠のむかしは、正[21]法明如来と号して仏法擁護のため、衆生の貧を転じ、福をさづけ給ひ、また南方にまし

くては、無量寿[22]仏と号し、娑婆の世界にては女意輪[23]観音となんきこえし。かゝればこそ、わがうるまにも出給ひて国を鎮護し、びやうぶ[24]の嶽、べに[25]の嶽てふ二つの御山に跡[26]をたれ給ひ、信心ふかき輩には今も現形[27]しおがまれ給ふとなん。その御かたちを、王城の久慶門のあなたの御池なる中島にあがめ奉り給ひて、世々の君、睦月・皐月・長月に三度のみゆきあり。是を三季の行幸と申。されば、上をまなぶ下の習ひ、遠き島人まで帰依渇仰し奉らぬはなかりき。かゝる御神の守りにや、わが君の御末葉さかえ、国ゆたかに、民やすくして、からの、大和の舟路おだやかに、みつぎ物時たがはず、五のたなつ物みのりて、吹風も静なるらしなど、法の師の談義めきていへば、人々うなづき、信おこしき。去年宿願とて、もろこし[28]舟の便に、御額一面（曹姥支天の文字あり）、二句の聯を求て[29]二[30]の海をわたり渡り来、けふしも是をかけ奉り、よろこほびにたへで、猶しも行末をたのめ奉る心を、

かけてしも猶やいのらむみづくきの
ながれたえせぬ神のめぐみを

注

1　弁財天女－べざいてんにょ。弁才天はもともとはインドの川の神で、琉球でも航海安全の神として航海者の間で信仰されてきたのであるが、神女とも習合して、豊穣予祝、王国平穏などが祈られた。

2　縁日－有縁・結縁の日の意。誕生日・示現・誓願などが縁でお祭りや供養が行われる。

3　旅のむしろ－旅の狭い草莚に寝る不便な暮らし。

4　四肘の塊－よつひじのだん。四つ足の経机の如きものならんか。

5 乳蘇酪味の百種－未詳。全体は、様々な多くの御馳走の意であろう。酪酥は牛乳でつくる美味なる食物、乳味は乳のもつよい味である。

6 ことそぎて－簡略に。質素にして。

7 余味応供－あまり物の食物を供える。

8 椎の葉－既出。「家にあれば笥にもる飯を草枕旅にしあれば椎の葉にもる」（有馬皇子）に由来。旅の途中で十分なことができないこと。

9 みてぐら－幣。神前に奉るもの。

10 離苦与楽の御本誓－弁財天女が琉球では観音とも習合していて、観音菩薩の本誓（本願）である、世界を観じて離苦（大悲）与楽（大慈）すること自在の意で、観世自在とも訳すのだという。

11 みそよそ－三十四十。

12 をのがじゝ－おのがじし。めいめい。おのおの。

13 たづき－生活の手段。

14 蔵司の人あるじ（し）て－蔵司はくらのつかさと読み、琉球假屋の蔵役をさし、あるじはあるじまうけで、饗応することである。

15 水むまや－水駅。簡素な饗応。

16 外様－世間。

17 さりあへず－（混雑して）よけることができない。

18 月比の御とくい－この数か月来の親友。知り合った仲間。

19 かたへ－片へ。一方へ。片方へ。

20 宇賀神王－宇賀の神。五穀の豊穣をつかさどる福神。蛇に姿を変えると信じられたことから、特に弁才天女の別称ともなった。

21 正法明如来－未詳。釈迦如来のことか。

22 無量寿仏－阿弥陀如来を無量寿如来、大日如来を中心にした四仏にも西に無量寿仏がある。

23 女意輪観音－如意輪観音。如意宝珠を持って衆生に財宝を与え輪宝を転じて衆生の迷いを破る菩薩である。

24 びやうぶの嶽－屏風の嶽の意。首里城下守礼門近くの園比屋武御嶽（そのひやんおたけ）のこと。

25 べにの嶽－弁が嶽のこと。毎年国王が行列して参拝する王国第一の霊場。

26 跡をたれ－「垂跡」をやわらげたもの。仏が衆生を救うために本体を種々の形に変えて現れること。琉球の神女は弁才天の垂跡であると『混効験集』の序文にある。

27 現形－げぎゃう。（神仏などが）形を現わすこと。顕形ともいう。

28 もろこし舟－唐土船。ここでは琉球の船が中国へ行って戻って来た船のこと。

29 曹姥支天－未詳。曹姥支天は弁才天をいう梵語サラスヴァティーの音写か。弁才天はインドでは河の神として崇拝され、琉球では大地を潤す五穀豊穣の神として信仰されたほか、ノロやキミといった神女とも習合して航海安全の守護神でもあった。『球陽』付巻尚貞王の十九（一六八七）年の条に、東竜寺の住僧盛海が久米村の東の内金宮（内兼久山）に拝殿を改修し弁財天を安置したことが見え、弁財天に注して「中国斗姥」とある。一八〇〇年の冊使李鼎元の『使琉球記』にも「（弁財天は）即ち斗姥」とある。あるいは「曹姥」は「斗姥」の誤写か。

30 二の海－琉球と中国、琉球と薩摩の間の二つの海。

御暇たうべて帰帆をもよほす詞

吉貴[1]の君はこぞの春の比より東[2]の都に勤ましく、此水無月[3]下の一日、御国[4]にひるがへし給ふ錦の御袖おがみ奉らんとて、中山の同侶いざなひ、あさ日[5]がくれより立出、西田[6]の市人に宿かりて、いつしかと待奉る程社あれ、先前駈[7]の行粧、馬くらのかざり色々をまじへたるは、よそほしくみえてしづかにうち過給ふに、やゝありて御そなへ、弓、鎚とつゞきて、かち立[8]のみさぶらひ、若くさかり成限り、二行につらなり、御駕輿[9]たかくて渡り給ふ。供奉[10]のつかさ〳〵、上中下みだれず、御しつかゝひ[11]には組頭やくらの司とつゞき給ふ。武具馬具のきらひかり、今やう覚[12]えて、思ひ〳〵のさうぞく色をまじへ、舎人[13]、雑色[14]等まで、かつら・鬘[15]・そらし目にかどありて、あづま男[16]の手ぶりあおとまでいとめづらしとみゆ。

是をおがみ奉らんとて、いく千万[17]となく、辻小路にもよ〳〵とみちく[18]たり。老・わかき、やう〳〵ちりあかれて後、帰り待き。かくて文月の五日、御城にはまうのぼるべきよし、うるまの事しろしめす司[19]のかたよりきこえ給へば、その日を待とり、今年[20]の御使翁氏佐久真親方、進貢[21]の啓使毛氏野里親雲上をいざなひ、うるまの御文、かつ御捧物[22]など奉り、次に下官らが御礼[23]もちもおさまり、君出御ましく、各ま見え奉り、おほけなくも去年[24]よりの勤、けふにとぢめぬれば、心落給て、菊紅葉の秋も末葉に送りて、今は御いとまの御せうそこを待奉るばかりなるに、長月[25]末の四日吉貴の君より御使、上村氏の兵えなりけるして、宇留間[26]への御かへりごとうけ給はり、かつ下官等御暇たうべ、例の御たまはり物などいたゞき、おほやけがたの事おはれば、此二年、花紅葉の折にふれ、月雪の情をかはし、うらなく馴きこえしかたの私ざまのいとま申、かつは別にちかき[27]馬のはなむけ、帰浪の名残にとぶらひ給ふ御たいめ[28]に、いさゝかのいとまもなけれど、思出草の末葉までも、ふしある事はもらすまじく思ふに、かねて舟

乗すべく定し神[32]無月の九日さへほどちかくなれば、いとゞ心あはたゞしくて、ながくみぢかく思ふ筋もまがへるにやあらん。かつはこんとしも定なき世の別を、かねて思ふもはかなし[33]や。

初しぐれふりみふらずみ神無月[34]
わかるゝ袖のいかにしほれん

元禄十三年庚辰孟冬[35]上澣日　　毛[36]起竜

注

1　吉貴の君－当時の藩主綱貴の長子。
2　東の都－江戸。
3　水無月下の一日－六月二十一日。
4　御国にひるがへし給ふ錦の御袖－吉貴の帰郷なので、ここの「御国」は薩摩、翻したもう錦の袖というのは、衣錦還郷、衣錦之栄、錦帰であらわされる故事に由来するもの。成功して故郷に帰ること。
5　あさ日がくれ－朝日隠れ。朝日がまだ出ない時刻。未明。
6　西田の市－鹿児島城下の南、西田橋詰一帯の町、出水筋からの参勤街道筋にあたる。上町、下町とともに鹿児島城下三町の一つ。
7　前駈の行粧－前駈は前駆とも書き、ぜんく、せんぐ、せんく、せんくうなどと読む。行列を騎馬で先導するこ

と、またその人。行粧は行装とも書き、外出のときの（行列の）いでたち、装い。

8 よそほしく－威儀をただして。いかめしく立派に。

9 御そなへ－御行列。琉球語にもスネ－といって残っている。

10 かち立－徒士（かち）風。徒士は徒歩で行列の先駆けや供奉を勤めた下級の士族。背高く大男で糸鬢に長羽織の風体だった。

11 駕輿たかくて－かよ。駕籠や輿（こし）といった乗物。「たかくて」未詳。

12 供奉－ぐぶ。お供としてつき従うこと。

13 御しつかゝひ－御室抱え。室は貴人の妻のこと。ここでは吉貴の妻のこと。かかひは抱へとあるべきところ。護衛・庇護すること。

14 きらひかり－（武具・馬具が）きらきら光り。

15 今やう－現代風。当世ふう。

16 さうぞく－装束。服装。着物。

17 舎人－雑務や警護をするもの。牛車の牛飼い。馬の口取り。近習や小姓にもいう。

18 雑色－ざふしき。走り使いをする男。行列の先駆け、警護にも当たった。

19 かつら・鬢・そらし目－独特の鬢や鬢それに反らし目というのは、行列の奴（やっこ）のいでたちである。注10を参照。

20 あづま男の手ぶりあおと－東男の手振りと足音。ここでは江戸の男・江戸っ子風のこと。

21 よ〳〵と－よよと。だらだらと。

22 今年の御使翁氏佐久真親方ー盛命の後任の年頭使佐久真親方忠祐。原注に「忠祐」とある。

23 進貢の啓使毛氏野里親雲上ー進貢使として帰任しその首尾を報告するために上国した。それ故「啓使」というのであろう。世譜付巻「進貢を稟報する使」（訓ず）とある。原注に「安常」とある。

24 うるまの御文ー琉球国王の書簡。琉球ではこれを「御状」といい、上国する使者に授ける儀礼が城内南殿で行われた。これを「御状渡し」という。

25 御捧物ー国王から藩主への送物。

26 御礼もちー御礼物。使者の個人からの感謝の送物。

27 とぢめーしまい。終わり。

28 心落ーこころあち。心が落ちつく。こころが安らぐ。くつろぐ。

29 宇留間への御かへりごとー国王への御返事。

30 ちかき馬のはなむけー近き馬の餞（はなむけ）。親しい者との餞別の宴。

31 御たいめー御対面。顔を合わせること。

32 神無月ー旧暦十月の称。

33 はかなしやーむなしい。頼り無い。

34 ふりみふらずみー降ったり降らなかったり。和漢朗詠集巻上に「神無月ふりみふらずみさだめなき時雨ぞ冬の初めなりけり」とある。

35 孟冬上漸日ー孟冬は陰暦十月の称。上漸日について外間注に「はじめの頃」とある。

36 毛起竜ーもうきりゅう。盛命の唐名。どちらかというとこれが本名。通称はこの時冨盛親方で、その前が嘉数

親雲上、幸地親雲上、帰ってから三司官に昇進し識名親方と称している。

〔得無子の評語〕

今度三冊ともに再見、いよ〳〵辞案之改削無御坐候。無隔心吟友どもにも見せ申驚目候。此上は無別儀返進仕候。尤此方にも書写召置申候。

中山の旅客冨盛親方はいにし春の比、さるよすがありて、一たびたいめ給はりしより素問に愆び、こたび始たる得意ともいはず、かたみに難波のよしあしつゝばかりの隔もおかず、うちかたらひ奉りしに、此程思出草と名付られし三巻をとう出て、おほけなくも予にそを苅侍れかしと聞え給ふは、いか成にやと開き見るに、去年の夏詔をうけて此国に渡り給ひし日記より始て、名も高知穂の神にみしめ縄かけし願をのべ、かの補陀山の仏にくる玉の光をのこし、あるはよし野福山にひく駒の数をかぞへ、あるは心ある友の恵をむくひ、問よる人の情をくみ、かつは大君の御末葉の千代をかね、故郷の軒ばの草をかこち、本の雫のはかなきを恨み、御いとまたうべて帰るさをもよほさるゝ初時雨の言ぐさに至る迄、巻々金玉の声あり。扨思出草ときこえし名はいかさまにも、平貞直が「かひもなき和歌の浦はの藻汐草かきをくまでを思出にせん」と卑下せし御心ばへ成べし。此真人は遠き唐土にも人やりの道に、千里の浪風を凌ぎ、北京の帝をもおがみ給ひ、此国にも三たび天水が渡の汐の八百合を経て渡り給ひ、つかふる道のいさおし、よの浪をこえて、大和もろこしの風をもよく身にならし、さるは蜀の江にあらひし錦のあやを戴き、かつは紀の海に拾ふ玉藻の光をそへて、かゝる色ある言の葉草を残し給ふは、誠に世に稀なるさきら成べし。「わがいふ事を」などいひけん、公任卿の言の葉もときぬべき時成べし。やつがれ本より「かへるの刀みゝずのこち」にて、ふしなき藻くづをかき添侍るも、かつはおこがましけれど、御求のわりなきぞのがれ所なる。されば此

三巻、御家のぞうにながく伝へて、世々のかたみにものこし置給へと思ふ心を、[23]

家[24]の風ふきもつたへて和歌の浦や
かずのたま藻を（かきも）[25]ちらさで

元禄十三年庚辰孟冬五日　　得[26]無子拝書

注

1 いよ〳〵－結局。ついに。
2 辞案－未詳。辟案の誤写か。
3 無隔心吟友－隔意無き吟友。遠慮のない和歌の友人。
4 素問に恢び－素問はそまつなたより・飾らない交流の意。恢びは心のび、心たらひ、とよむ。満足する意。
5 得意－親しい友。
6 難波のよしあし－難波江の名物であるよし＝あし（葦）。その短い筒（＝節）の間のへだてもなく、と続く。
7 とう出て－とり出して。
8 おほけなく－おそれ多い。さしでがましい。
9 苅侍れ－「思出草」の草の縁で、「苅」としたもの。
10 補陀山－補陀落山に同じ。インドの南海岸にある山。八角形で観音菩薩が住むという。

11 故郷の軒ばの草をかこち－故郷琉球の家の軒端に生えているしのぶ草にかこつけて、故郷をしのび。

12 初時雨の言ぐさ－思出草の最後の歌「初しぐれふりみふらずみ」の歌のこと。

13 金玉の声－すぐれた詩歌文章の形容。既出。

14 「かひもなき和歌の浦はの藻汐草かきをくまでを思出にせん」－続後拾遺和歌集に出る。歌意は、つまらない歌ではあるが、和歌の浦回でかき集めた藻塩草ではないが、書き置いて後の思い出にしよう、というもの。藻塩草は製塩にもちいた海草のことで、かき集める意から同音の「書き」を導く。

15 天水が渡の汐の八百合－天と海が接する大海原を渡り、非常に沢山の汐が集まり会う所（をへて）。祝詞に「荒汐の汐の八百道の八汐道の汐の八百会に坐す速開つひめといふ神、持ちかか呑みてむ」（多くの潮流がもみ合い、多くの海水の通路が寄り集まるところにいるハヤアケツヒメという女神がそれを持ってかかと飲む）とある。

16 蜀の江にあらひし錦のあやを戴き－蜀の江というのは錦江という四川省の成都付近を流れる川、俗に府河という川の水で錦をさらした蜀江錦、この錦を着て故郷へ帰る故事をかけたものである。

17 紀の海に拾ふ玉藻の光－紀伊の国、今の和歌山県の和歌の浦に拾った美しい藻のように光をはなっている歌や文章。ここでは特に和歌を暗示している。

18 さきら－先ら。才能が物にあらわれたもの。弁舌や筆勢などにいう。才気。

19 「わがいふ事を」などいひけん－藤原公任の有名な歌。千載集に「うるまの人ここにはなたれきて、この人のものいふを、ききしらでなんあるといふころ、返ごとせぬ女につかはしける」と詞書があって「おぼつかなうるまのしまの人なれやわがことのはをしらぬがほなる」とある。公任集にも「しらぎのうるまの島人きてこゝの人

のいふ事もしらずときかせ給て、返り事聞えざりける人に」と前書して「おぼつかなうるまの島の人なれや我恨るをしらずがほなる」とある。ここのうるまは新羅の属島であった于陵島今の鬱陵島のこと。長保六（一〇〇四）年三月七日同島人が因幡に漂着、上京してしばらく滞在し詩の贈答などして帰国している。その後連歌師里村紹巴が「狭衣物語」の注釈書「下紐」（一五九〇年）で琉球なりとして以来、十七世紀にはいり薩摩・琉球の文人の間で奄美以南の琉球を「うるま」ということがひろく行われた。

20 「かへるの刀みゝずのこち」－未詳。蟷螂之斧の言い換えか。蟷螂之斧というのは、自分の微弱な力を考えずに強敵にあたること。蛙の刀（かたな）、蚯蚓の太刀。「力なきかへる、骨なきみみず」（「催馬楽」）。

21 ふしなき藻くづ－目に立つ所、目立った特徴のない藻屑のようなもの。「藻屑」に自分の文章に対する卑下があり、「かき添」に掻き添えと書き添えをかける。

22 わりなきぞのがれ所なる－親しい間柄なので逃れがたいところである。

23 かたみ－形見。記念品。家宝。

24 家の風－家風（いへかぜ）ともいい、代々に伝えてきたその家の伝統や風習をいうが、転じて個人歌集などの家集にもいう。藤原経家集に「家の風吹かぬ身なれどひとなみに和歌の浦にぞ立ちまじりぬる」とある。

25 （かきも）ちらさで－底本、括弧内のように二三字空白欠落している。外間注は「とりも」を想定している。上の藻とのつながりでは「苅りも」も考えられる。

26 得無子－未詳。外間注は「島津家の祐筆日高治左衛門為一か」とする。得無子の跋文を良く読むと「村田氏」か。